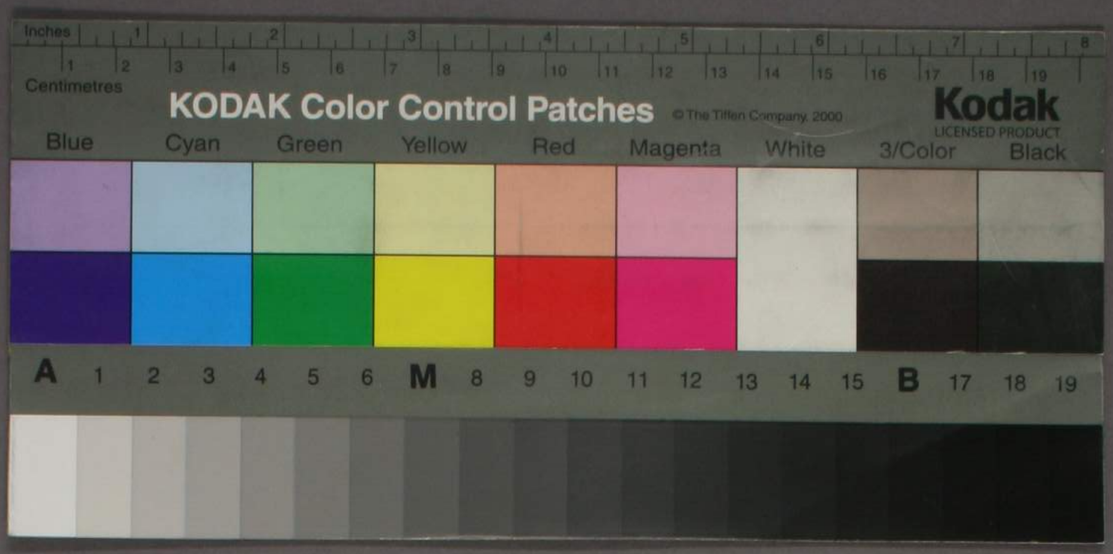


学習文庫
文庫8
A 38
1
貴文

大槻文庫

磐水先生隨筆卷之六 七

○奥行日記

天明六年五月廿八日、自支封之鑿負、榮進宗藩、且永奉官邸祗役之命、時鄉里有北堂及妻兒之在、故欲舉家移居於東都、方官途與治業未暇遠行、荏苒至七年之秋七年九月廿一日黎明離材街僑居携一僕跨馬發欲遠迎秋奥中之家人、前夜交友諸子餞別、半夜始決去晝間風雨頓霽、天色明朗、向曉風寒、馬上不堪、士幹李子送材街之第五橋告別、而右渡江都橋、經本街至淺草門、夜始明、過淺草三斥至千樹大橋、右望秩父諸山、左見筑波峯、驛中居人、繁駭時是早、且賣諸蔬蔬者、尤衆、是運轉都

下之物矣過千樹抵草加飲茶亭夾小流皆長堤出千樹
左右田畝平曠多陸種菽粟布見富岳之半狀 腹 此時風益
厲午前至鉄谷飯茅屋連簷比小邑頗長計凡三里余出
驛遥望見真髮山申時後風稍止至稲壁宿醋漿亭
廿二日蓐食而発離驛衣已明天色快霽立鼓抵幸手出
此驛数十歩有小流甚前後田畝盡為荒墟沙漠之地是
去歳襄陵之変所致可嘆又行数百歩至栗橋堤漸出中
間三面開豁是昔時所不見也左有大河流是所謂刀稱
水 本邦三大河 第三之 也一也去年河水泛溢而破壊長
堤左右之灌木叢篠民家皆一時流却計一百有三十間
之際也道旁田園悉荒蕪其限不可見斉之開豁為之故
也堪慨嘆又行数十歩而下堤至栗橋驛過関門出渡口

是武野之封疆也渡河而至中田小憩暫時欲到古河自
此道路廣濶左右松樹連綿実王侯之大道也隨行而日
光諸山望至近就中突兀者中禪寺峯也布方白雲一色
無物見特巋然秀出者筑波峯也行望古河城樓至其都
邑日已午比前後諸邑頗豊謁 日光大王之歸東都經
野木間小田黄昏至小山驛宿四角亭此地也昔時小山
判官所城斉商城址存云 大 慶長間 神祖欲伐上杉景勝
至此地時伏水有変還 田 駕 隨 有關原之役云
廿三日寅時後発小山驛行新田之途中筑波雌雄雙峯
映加日粲然經小金井石橋崔宮至宇都宮此間日光諸
山斉抱如繞墻甚高者皆巔頂見雪右常洲諸山連綿宇
都宮斉京北尹戸田公之封地左通日光直道與羽之道

路人屋許多去東都以来之一都會也遇杉前侯之朝東
都離此驛右鳥山雛山諸峯在目睫申後至白沢下馬往
行出驛有河敷流所謂綿川是也日光諸山之下流也有
小邑曰阿久津香魚此地之名呂云味頗佳黄昏至氏家
泊福田屋此驛乙巳之冬羅祝融氏之災驛中居委灰燼
今再修未半
廿四日蓐食発行数百歩夜正明寒冶栗烈宜満地秋霜
降高原芒〻羅嶽那須等諸山雪降為白色是當年之初
云夜時抵喜連川驛中有小流所謂喜連川有懸崖曰掛
崎入驛小憩是地即喜連川侯封地侯足利將軍後裔而
門冑□□毎歳例以臘月廿五日朝東都以正月九日飯
封地云出驛又有河小山高岡跋渉至作山那須七騎之
一福原君之封地自此經那須荒原至大田原那須原者
名高之大高原也幅員六十里云野州諸山至近大田原
驛中左方有岐路到日光山之處也此驛者即大田原侯
世所封之地民屋頗豐過鍋掛有一河曰中川殺生石之
下流而注水戸西海云渡河泊鉞堀雖子稚黒羽侯封内
云時黄昏也津輕藩士同宿
廿五日平明発攀山阪至芦野小憩七騎之一芦野左近
君世所居云午後至境明神是野與之封彊所謂白河関
也両國安明神祠奉右鬻餅家庠頗潔雅左方那須層
津諸山白雪繁然申時泊白川兩衣屋是問老鉞中侯都
邑人民繁夥一方城府也
廿六日蓐食寅時発平明大霜嚴冶經十田川大田川踏

瀬大和久新田至矢吹右方有岐路棚倉街道也過久米
石笠石須加川小熊經佐〻川日出山小原田申時後投
宿郡山淡海亭地頗賑多岐樵斧日無風快霽會津二本
松諸山雪牽聚高力公家臣同宿至羽州之封地人也
陶談至夜半頗風士也
廿七日朝冶微雪霏〻夜明発經福原日和田高倉至本
宮小熊地頗豊多岐家過杉田至二本松丹羽侯之都邑
驛長六里人民繁夥至二本柳自笹川至此丹羽侯封内
也舉山阪黄昏泊第八街藤倉亭此地山中民所□也人
屋頗多有妓家
廿八日平明発至若宮清水町此間山阪多西方見虹左
方沐澤福嶋諸山雲皎〻就中諸峯連綿中突兀者小芙
蓉也風色甚佳至福嶋時四鼓板倉公封地人屋頗繁夥
出繭絹及油紙等所製煙包兩衣尤名品此地屬信夫郡距此僅里
許有一大平石其石面自有草紋俗稱止諾蒲者也古来
國風所詠是也土人摹絹或紙鬻風士騷客甚愛玩之出
驛有小流自此北地至貝田縣官所近見屬秋藩置有
司教人治之收貢歳入物奉官瀬上乗折藤田貝田諸驛
也皆屬伊達郡左方連山中殊巋然者半田峯也山中出
銀鑛已百有餘年所鑿昔時日得銀鑛得七八百斤云今
僅得二三錢云山下有金居家六十餘家云又道左傍僅
数十歩有一古松蟠根跼蜒四方凡百軒実奇奇木
也僻地恨少人賞俗稱源廷尉醍松其往来可考又道有
一大石俗曰弁慶硯石其旁有大杉称笠松近傍山中見

羽黒或權現等諸祠是等屬福嶋府入貝田有一圓山名
曰九山是所謂伊達大木戸也黄昏入貝田又行半里許
日落泊鉄河阿部屋自此秋藩封地也此日終日快霽
廿九日寅時後蓐食発至犀河夜已明此道路小嶽甚多
極艱難經轢鉄而近犀河有河出墨俗称孫太郎傳
云小児五舟聖茶其物未可考右白石嶽諸山秀山左布
山〻如繞墻至白石則日已巳時此地長臣片倉氏所城
人民繁夥産紙温麺及紙布葛彩等最名品云岩驛有川
曰白石川經宮金瀬大河原舟廻黄昏泊槻樹南部屋槻
水驛口向見一山頂上蒼松連綿風色頗雅是東海中舟
子所標的也呼曰千貫松舟廻左方有船岡山此下有長
臣芝田氏居館道路白石河流終注安武隈川云槻木右

方有羽州山縣岐路云此日午前快霽午後大風至暮歇
晦日平明発抵岩沼途中長堤左方阿武隈水曙色甚佳
右方見千貫松厥景頗雅致岩沼古内氏封地一之街
邑也至増田逢常州龍崎村長松田氏同行至中田經長
町渡河憩五家庄午後泊府下百騎街松崎氏賜第主人
不在逢嗣子某
十月朔日快晴達書認九ツ前右宅藏人屋敷行く
暫閑話夕飯給舎人屋（寄ヨドミ搭を渉中島
丁（出加左ヘ曲）行き願書方メ久云恵しき由で
指帰ち物書千兼直七也帰り銭ヶ遠方汚辛（寄
與方（逢新来大槻俊左ヘ對話暮方帰ち
二日早牡湯ヘ行前出立中堂丁荒井（行く願

納ル秋保貞次（掛屋）帰ル松井氏（寄暫く物語夕飯
酒を行ハる一関師（寄り岩井初（逢ノ暮ニ帰ル
三日終晴晝ハ折ニ雨後中歌朝飯後出宅千葉小源太
小崎甚兵衛留主夫ヨリ田中久太夫（行出會　肴藤
忠兵衛（被招行松崎先キニ来ル肴藤別荘ヨリ大橋川
を堅ル見山本九ヶ所の連山愛宕ハ五ツ紅葉如染錦風
色甚佳懇亭至潔雅閑話し夜五ツ半頃ハ五ル
四日朝霜早朝寺町丹野十郎兵衛（行同心町小崎（行夫
ヶ小田原金剛院町土屋十左衛門（行五ツ半過帰ル
八ツ半頃ヶ出宅菊地嘉四郎（行夫ヶ遠藤弥平（
寄酒を行ハ松井玄潤（寄夕飯饗ル一関屋舗（状
頼ム暮ニ帰ル○肴藤ヨリ葉未増田甚吉来ル

五日朝霜後肴藤（茶遣ス朝飯後出宅増田善吉同伴
下村友琢（行き頼ム夫ヶ助五郎ヶ秋保遠山等（行く
留主夫ヶ二日町（出ル江戸新石町西村治介（逢フ
立町勝田宗閑（行く夕飯饗暮方帰ル
六日朝後早朝秋保（行朝飯被振舞帰リ毎丹野（寄
ル四ツ頃帰ル九ツ後出宅蔵人殿（行き甚ル話ス（出
會帰宅肴忠（寄暫物語ヶ夕飯被振舞暮前
帰ル
七日早朝風呂（行く千葉小源太来大槻伝太夫使者ヨ来
ル四ツ半頃出宅下村友琢（行く暫閑談夫ヶ千葉小源
太（行く茶調ル遣ス中山左太郎（杉崎状届ク不
佞本城拝見ノ為メ有ク一関屋舗（寄り大休ニ逢フ

同僚岡道伯ニ逢フ大町二丁目ニ住居ノ由ニ夜半後帰
る
八日快晴早朝丹野（手紙遣ス書ス）森彦留主ニ被
招行ク蒼餅饗ス（氏家勇五郎ニ逢フ河内也）暮方
去潤（寄ル五ツ長毛物語シ）帰る小源太（手紙遣ス）
九日晴霜早朝洗湯ニ行四ツ後千葉小源太（行く色ニ相談
ス）旦内儀来談ス夕飯饗さる八ツ半方帰夫ク茶畠
林子来（尋留主ノ）只ト嘉勝ト云フ（終日便秘
肛痛ス）
十日朝霜快霽洗湯ニ行る畳前在宿屋ニ中目道意ニ
逢招ク滄洲先生勝田幸助高橋鳳斎梅原長宜等
来会餅喜ム酒食饗ス四ツ頃帰る昨夕建部先生

仙看ル（手紙届ク林子来る）
十一日朝霜快晴早朝小源太十郎兵衛（行ク九ツ頃ヨリ
縫殿ニ行加藤八弥留主也）夫ヨリ平賀（行き小崎
ニ逢ヒ帰リ）無ケ滄洲先生（寄る）言語白石侯箱服
子等の書を看る夕飯被振舞伊達保原梁川の風士両
人ニ逢ヒ梁川の人佐久間栄次と云ふ人江都ニ住すと聞く
十二日快晴朝飯後前田ニ至て市本先（行く中山左太
言扱ふ）市殿向ニ行ク作ヲ拝見す殿閣経営の雄大
宏麗序の所不能諸島の間穆の間首実撰表上座ニ居
みの間ニ入上座ニ右天井きんたり付諸木悉く穆木
と用ひ結構技巧の工ニ成る序人ニ及ぶ所也丈夫ニ作り
立ル物ノ如シ日暮帰る市門彫刻積翠ヨリ菊相の御

門を入るとその門前に唐金の大筒壹貫目八百目と仰かぶり置く車臺あり左右に八ツカンとい（る大筒五
丁五ツ是亦六七百目の）とのゆ殿閣左（古内要人祖
先普請奉行のゆ）大故なる諸所役の宮ゆきに巴の紋
有り山かけ作り眺望表住居下を目下に見て賀瀬川
近所の懸崖を引込もゆ一面自ら毒色の形を為す故
なこれをビワンビと云ふなり作りきん瑞鳳寺あたま
大年寺山見く遥か向ふに海上渺漫左右塩ゆあの山
左ゆく金華山遠上にあらわる海岸一面渺々たる
ものハ宮城野なり手前町ハ左右比屋連甍かき
ならべ也なるゆく動く絶景なり殿宇の左右
奥右の址のゆ今伊達藩ハ貞山公の居城跡

歸とゆ初ハ一の居館の跡なるゆ一をの名
の言ふ所天主臺のゆ廿五間の間と云ふ雑費作りきりたく
結構なく云ふなくを作りなくと云ふ此間を行きゆき山
奥に至ルハ岳具藏ノ銅作りあり遠方に畑硝御藥方と
いふ向ふハ大澤人倫通ハすと云ふ山中三ヨウ野ゆ故伝に御
城番を猪の口番と云ふゆ今福原帝三郎黒澤右仲
中沢左二郎也中山ハ北府殿家老中山備前なる左二男
家ゆも義山ゆ時召出なるとい神祖召用の緋威どの
具足を義も高八百石塩倉町に住せ帰りハ市二の丸
へ出て大手を通りて中左くゆ所壹貫（壹）なる酒倉
を拵れ田村藩へより暮方帰る
十三日昨深更より雨朝歌舞朝飯後小源太へ行き金

を表敬を謹こ陳ら代世夫が廉又口所へ行松田夫妻
等の達ア田中久左衛門へ高麗千葉屋七へ山源太が
手紙を以て遣すに赤石松井へ寄り夕飯を振舞暮方
帰る
十四日快晴早朝秋保へ行き何やかや振舞飾振舞
帰宅山源へ寄り口ッ比帰る後日在宿左衛門へ託宣す
遣者へ宅方に二度以来夕方山源太へ状を認め為
赤石五丁目へ西へ貳多寄一五郎へ寄り五郎へ寄り
赤石
十五日昨夜中より雨早朝秋保下村千葉へ手紙を以
洗湯に行く加藤八郎へ不在なして達せず後日在宿秋
保千葉へ使を以て下村左隣へ寄り桐油切り山崎へ

手紙を以て遣す五ツ半時暮帰る
十六日昨夜中雨今朝歇風霧早朝山崎へ人を出す
赤石五ツ高が遣者赤石ッ比思立一宮へ参詣に
出る原へ行き宿内に到る湯を浴る宿物師用先湯
を浴て以前根かんを取り夫が行新石坂方へ
寄り赤松山へ登り又行くに貳里余にして宿あり
今市と云ふ宿の茶亭へ憩ひ酒食を調ひ別る比
所を出て川あり今市川と云ふ橋為川下へ切りて出
うち出る夫より行くに又新石坂へ出る壺碑
十二丁廿四間と云ふ碑あり向ふの山を西へ尾ぶきの
山村見る二ツ昨碑有り行きて見る尾長を指ふ右
の方へ出て新石坂へ出る尾長一枝を求む右へ行

くるに船十歩民家は藪多く蘆垣内は所り尾花を吹
日を暮るを待て行くに半丁程なる足らずして奏者の宮あ
り塩竈社の森見出す七ツ半時塩竈所（第月代別
りも安部や鳥助といへる人許に宿する社参す石の鳥
井を経坂門を登て随神門を入る右に一社（清て
左方に別当寺あり清て御社あり社前に石銅の燈籠多し
右方別当の方へ出る坂あり坂を下り神庫あり和泉三郎
が献せる多治年間の銅燈籠あり坂を下り風呂（所
旅宿に戻る夕餉仕舞て妓来る両人来り両を併て宿
の老人来りて小曲の謡を酒肴を出て年を近づけて国
を祝す終日風吹き暮る方歌在中月清朝樹間より初る
風色言葉に尽

十七日朝大霜早朝河岸（行く漁船多し塩竈の竈
の社に（社頭昆布潮騒を聞家あり風呂に入る帰る
四ツ時朝飯仕舞て乗て牧川迄（送る船多し民家
岸に在を持参の二三尼御（今市より又越列暮方
車の湯に入り帰る浦の方草刈小昆布食事仕舞て
寝に就く
十八日朝大霜快晴早朝秋保小崎（人夫を出す時頃
乗出（行き小崎（出逢今日 所曹司揚山任せし
山頂検査し諸方を始として方勤し元と帰上内出を
大手急車を繰出乗て秋保郡検者多し帰り鶴勝
田（着り田村郡（着小原左（着夕餉上振舞夫
より秋保（行き乗て着て振舞夫より帰宅

十九日 雨 晴 快晴 朝 雨 雨 飯後 日向 度 行 学 今
夫 ゆ 書 度 書 酒 と 振舞 夫 が 松井 ゆ 祈 祈 祈
書 石 七ツ 書 帰 石 夜 中 祈 同 行 し し 夜 行 キ
住 度 石 去 ゆ 国 ゆ 町 面 度 や 四ツ 帰 る 秋 係 が
不 書 元 書 石

廿日 朝 洗 早 朝 洗 湯 月 代 行 く 雨 飯後 書 人 度 行 キ
平 度 面 雨 度 人 ゆ 書 不 逢 夫 ゆ 少 度 番 千 島 田
歩 補 書 不 度 七ツ 後 帰 る 惠 美 須 講 餅 ゆ 暮 方
ゆ 雨 平 行 く 夫 作 者 物 雨 も 投 為

廿一日 朝 雲 晴 晴 歩 度 る 朝 飯 廿 平 ゆ 関 行 キ 物
雨 ゆ も 夜 時 書 度 帰 る 晴 る 雨 餅 ゆ 七ツ 過 帰 が
廿二日 昨 夜 中 が 雨 七ツ 後 が 平 誓 行 く 背 蓑 を 見 四ツ 後

上 同 雨 夜 鳥 山 石 山 度 我 去 ゆ ち げ 市 勝 利 の 雨 ゆ 横
井 平 ゆ 祈 ゆ 度 中 逢 中 雨 後 人 ゆ 同 行 し で 方 所
三 千 め 上 来 石 関 夜 方 雨 平 九ツ 過 帰 平 外 国 邦 」
廿三日 朝 晴 微 風 早 朝 洗 湯 行 九ツ 後 ゆ 遠 度 行
夫 作 ゆ 逢 中 夫 ゆ 千 葉 ゆ 源 夫 行 く 不 在 ゆ 帰 る
暮 方 ヨ ヒ 祈 同 行 し も 行 く 人 山 人 浦 出 く 帰 る

廿四日 大 霜 平 外 後 ゆ 祈 ゆ 朝 飯 後 蓑 人 度 行 去 ゆ
南 逢 夫 が 書 湯 書 が 行 人 と も 少 材 市 行 と
行 ゆ 帰 る 夜 中 祈 石 祈 行 く 餅 と 振 舞 四 後 帰 る 三 人
同 行 ゆ

廿五日 昨 夜 八ツ 後 が 大 雪 和 る 斉 朝 祈 去 度 と い ま 雨
書 行 し 行 く 飯 後 後 い 源 去 行 夫 が 遠 度 行 キ 酒 後

園墨

拍舞ありて夕飯と拍舞者来る序後者
者が少傍国　留守へ行く帰宅ありて酒宴を
喫し四ッ後帰る加藤家の西小者来る西方者
廿六日朝晴折々時雨四ッ後中嶋所加藤家
来る　加藤吉左衛門来る　平賀（晴）より
来る夫が屋くら所　表　板井　大井　表
し源左へ　表　表直　板井　帰る　大作来る
不逢　荷物出家　募　加来　井　表七ッ　四ッ後帰る
信濃　表　加来　井　表七ッ　四ッ後帰る
廿七日朝晴早朝洗湯人吉逢洋一　九ッ後吉来人生ハ
屋七ッ田（八ッ半）　留　表　氣仙屋といい
る　表　左　路　泥　深　半　遠　園墨　大作来る

廿八日晴朝七ッ時発一路　去　園　留　立　表（表白丈
作　後昨夜　募方先　立て来る　留朝飯　拍舞　穀田
屋　表　病状　詰　知　知　定　見　往　表　宵
宵　誹　湯　好　屋　園　屋　月　屋　いい　五ッ後　立
山坂　攀　三本木（動　坂中　風　住中　後　吉　立
携　多　表　赤崎　防　神　表　表　霊験　ありと云ふ
西方　疎　渕　三本木　吉所　ありや　表地　中　左　田畝
薄　暮　あらや　出　五ッ　主　法水（者加　賀　御と
いつ内　表
廿九日　晴大霧　昼　快晴　七ッ時　発　瓶　鍋　高野　五所　あら辺
沢　金成　経　壁　募　一　園　宵　諸　夜人　出　勤　五ッ
帰　夜中　諸　来

霜月十七日曉七ツ時過家屬引纏ひ一閑を発せし八ツ時
地震夜快晴雪の内餞別に諸君大勢未曉古石崎
黒部若宮等訣別する未だ高橋祐元宮仲田崎等宿
をつれと送る至壁を言計德し竹民次七次祐元家
未清太等未明時別を告く金城沢を宮地籠鍋を経
て暮色掛荷と家不肖者塔貳挺江を者加賀屋に着る
屋か雪一入寒冷南聖ぶ
勇奏仙蔵と雇ひ
十八日曉方高清水を発し荒谷古町を京水経く暮色
去民手葉言葉く許に着る如加大積痛勢思十七高
来雄作お方と云ふ針醫と拾ひ村友隊門人の
中日雪降る

十九日五ツ過発し新町七ヶ田を経て暮過中宿
ら町遠藤（本宿同じ所百姓所）行く四ツ後帰る
四ツ時雨降る
廿日快晴九ツ時分より平塚古田村へ行く夜中伊左衛門
方へ針灸を頼む一分を請ひ差を貰ひ一
圓を発し登る後に雷雨降る蕎麦四ッのみ
松小源太来る諸事五ツ時
廿一日快晴昨日同じく百藤町長平所へ行く四
ツ後帰る○昨日松崎より遠藤
信濃屋尺八儀ハ清吉来る七ツ飯済
来る弁当ニ付村松市右衛門を頼
外差新井長七当来る八ツ後来る百藤
徳次郎来る
廿二日快晴暖四ツ後御下を発し遠藤家長所
者ハ来る昨日より暖気路泥濘
中田増田を経て暮近岩沼藩黄牛や
る者ハ中駕（千葉小源太伊用も源や家を借り許
ハ有り五ツ頃訪帰後日人又十番へ来る今日途中
石原屋松木新三郎等江戸より逢ふ十一日本都を
発し
廿三日朝曇明方岩沼を発し教百歩ハ藤場の渡
しを過く是れ阿武隈の下流凡八町荒濱と入る
海口ハ逆くと云ふ此川越後ハ源を会津白川
等を経て此ハ五ヶ川を渡り一里余まして直理に

伊達房州の居館八丁口出口より星崎町駿中願寺
繁昌中坂等を経て山下に至る房州領又中坂を攀り
坂下に至る此間右の余程小高き山々より左に一里
ゝ為らずして皆濱多なり潮方喧しく昨夜より吉け
噪しかりし是れは今日両国左右の九ヶ所の橋が
両毒方歌左衛泥海に坂本に久保寿人在家に千石
といふ毒里まゝにて暮方新地に品川や加内が許
ゝ居るつゝといふ濱多を去る者僅に十四丁といふ
廿日の朝晴風曉発東方海上隠見風色甚佳濱と塩焼
場を見へる立ツ寄駅の峯に到り市街を利紙驗所に
紙を買ふ境目後へ出切手紙の方法能直打す門
百稲荷毒已酉廿五日中地大番所新内大
内毒毒地なり三千石といふ関門と称十歩ばかり
並松平〜先仙毒お毒境なり黒木に至る
毒より中村の出抜れ鹿嶋に至る者の居荒亡の地多少
驛と称家多〜中村に至る者毒の諸有一方の都
会也有何離れ川を渡り山澤を
これを過ぎ鹿嶋に至る中間多くは平坦の地左右の
田畝悉く荒蕪暮方原の町場
廿五日厳寒逢中悪毒水陸曉方東所を発す稼と
おく所平〜形謂お毒牧なり 中央往還と左路左右坦
原皆牧なり言数千坪と称毒の間多くなる
反方に僅四五畝を見る中間所は一里左毒中
関国七里といふ廿日中の申発す至り有下の人甲冑

を常に野蛮を免れず二里先小高の稚児を立て物見
杖を曳き高く言を張るを聞くと云ふ君は左右の小高き所に
陣を張ると云ふ夫が山高く嶮なる新山を経て暮る熊川
に到り 檢分 の許に入る
此或は見れば風色佳勝山高く谷深く片大江と
谷河改部といふ熊川を去れば
左に荒巳の地あり
廿六日曉熊川を発し中百石海を見て風色佳西
岡に到る是より西領中井清左衛門屋敷に泊る
宿駅駅なり西は大災にて
駅を出で山坂あり日暮坂といふ
より先年風雨に大樹を吹倒し左後人の此方
西面に左面要に打て海原色を見て風景面白し
水戸より廣地を経て野濱に到る中百浦に一里
風色面白し右は岩下海岸行くに新方歩は
海岸を立て岩に地蔵岩あり右は崖地城
形にて岩に腰を踏て行く夫より西と坂にて
山を越へ出る頃の鄙僧房方久慈濱へ出る
東町裏直に海に出る是より海岸を経山坂を攀て
出ずれば廣 左
方に富岡の人家多山わきに
廿七日軽海口に発し平に到る一都廣の宿安
左對州封地入口より城根右に見る町幅廣し旅籠
町にて入口に門番西に南の出口板橋

手より右面とい小入口鎌田川より夫が湯本に出る
無るが湯より後行き葉の許の温泉に浴も出情一度
事に中駅失火造営未事中往還中駅のを責故を
うといが町故れ中るを西に温泉社より新田へ行中
町濱戸町二ツの別の負町なり湯本が二ツ出代な
西といが是より上田への途中左の右と表く
湯本左といが小駅内為新三郎右志地中服の泉といが
西より本家弾正為志地中を願ひより暮る上田
町仙蔵屋 の許の屋の君屋宿の酒ひめし
関なり中駅が関田より本願といが
廿八日快晴朝出り上田を発し立町より川より
ちめ川といが一里より関田の動る渡打傷と好く

の半左より所謂右古宿駅なり山坂新右衛の
間半腰なり切通し長の拾立ち宿左幅員宿拾弐
立ち大頂の西本向なり僅の三尺より偏て格床生く
重れり これより海上信見より神長へ為の夫が生洗
中宿拾弐左方海原橋地蔵を渡に松く風色者
此り神長入口栗林といが西が左方平海への左より
半左といが一方の要港なり棚倉領なり長洗が此
信領荒川がちらしに少拾弐より夫より高宮を小市洋海
長三郎の許の屋の中途中川底和色との小邑より
廿九日快晴暁小本洋を発し助川より動る中宿山坂新
海上見の日見より小孫夫が森山同所右方に拾波
諸峯見へ左方一面に平壌の民林海を見るる高

遠く貳里ゟ餘ゟといへ共ゟ大橋ゟ到る百みゝの
原ゟ八丁程東服ゟ泉川といへ而ゟ
國風の詠する而説ゟ中而ゟあらは伊賀山城ゟ境
至置山ゟあり〻といへ共ゟ水ゟ入口ゟ硯大臣神の社
ゟ大橋ゟ石神へ方ゟ岩川といへ川ゟ船渡
田中といへ者ゟ大橋ゟ十丈ゟ餘ゟ長田
多此所ゟ石神ゟ沢ゟ中稼ゟ鹿嶋へ出ゟといへ沢ゟ
板川ゟ中ゟ田ゟといへ所の者ゟ板川川嶋や手沢
〻行ゟ舟ゟ勇ゟ賀ゟ賀ゟ山ゟ沢ゟ稼ゟ人ゟ
大逆陣ゟ
朕ゟ新ゟ快晴朝大霜晴板川ゟ発〻数十歩ゟ渡ゟ板
川船渡〻拾ゟ丈ゟ中川銘倉門橋ゟ月ゟ中川ゟ下流

手程ゟく水有ゟ到ゟ長さ三丁ゟ程川幅廣く一都廣
ゟ橋ゟ渡〻上ゟ方ゟ此ハ拾ゟ古墳見ゟ有ゟ橋貳ゟ
見ゟ由堀橋ゟ此ゟく人ゟ到ゟ遅滞長居ゟ幅ゟ
繰ゟく此舟ゟ者ゟ日ゟ到ゟ夕ゟ進ゟ先鑑
ゟ此居長中添ゟ神ゟ有ゟ
二日快晴朝霜晴発〻竹原ゟ好ゟ寺山頂ゟ向
ゟ霞波見ゟ有ゟ拾年橋ゟ対地一都廣ゟ
町ゟ切板此女男川ゟ稲荷中賀岡社ゟ此所ゟ
者ゟ経〻上浦へ入ゟ居民繁賑ゟ事ゟ而ゟ海ゟ
十八里江戸へ向ゟ暮ゟ中村間へ泊ゟ土屋所
領地ゟ
三日朝霜晴発荒川十文字ゟ経〻名主へ暮ゟ

為向風場表藩領泊る事也所々の平場の地所為泥濘荒川年久ハ山口中しを居る地
四月暴雨ッ以ての細雨年駅晴曉雲行くるる教十歩を
しく舟漂ひ二流ありり刀稲の下流也秋孫ある人生里迄
筑波峯江を見田を秋孫ある河ある人家人貳里稲と
いか而ひり貳拾八丁の百姓野これ所謂小屋牧也横
七八里の平らとしいか小屋稲を陣屋ひ平十月
宮ひり高を生るといか中百姓跡泥濘小屋ひく拾
戸人壱里ハ九丁百姓ひ貳拾人ひ秋父諸峯見田八ッ
後拾戸稲荷ヶ平片鷹ヶ許を居る舟屋貳歩貳百こ
五月朝陸

磐水先生隨筆卷之七

○菟伎能片枝

我身生得愚のよしてオ乏しく而ハ人ハまされ
ぬといか事を而一事一稱きり老こ名人ハ出き
人のさとしを而るなんと事のとらハ〳〵ひを而ハとめ
ぬ名性多ひ年長し物のもし目稀ハ〳〵似ひる
二十とせの頃ひりハ人〳〵の物語れるを覚へく而ハ
ちと和歌し と思へるを程似ハを学ひ名ましされ
と天性惰慢而ハ唐大和雅俗の諸書数多き中
ハ古ハ一部通俗一部家也しといかるをかしから
うしと大和うしとて八風雅の在を程さら丈方の上

されは人に見すへき程の事も得出来さりけれは
識見の出れと立るへきも無かりし自身天才の縦横
に用ゆへきものとも見へ侍りたる秋毫師等の企
を絡ひし一創業の事も有さるの志偶つきし真法を
婦女子の信りこれを法とめや果すんと志偶定め
し至らす如此と知れさへ生ひ立拙くものゝ本は月日
増益しうつや識量の識者にして氣慨の薄きくしる
然ハ身に受得る事有りし打寄りし憂患人情世態の変易
なんとに出はいかて胸はかりさへ軽くなさへ兵に
得成させさりけるにあれも尸位素餐とやらんなる
重く天地に載さへ識者に對し面白俺觚とや
いかて免し今日十年の黯夢の如く過越し空く打ち

てんなと遠さかりしと思ひ侍れハ我身只得し
愚なる事を人々見て見へまて見しきりし思ひおし
なすも何事ねならうの事なんたひにもなんのかきつて
なんと思ひ立ぬ幸と云とよりし口つきの
きくなれへきなハ元ト学業の薄く才能の拙き
ゝ有なりしまとなり世に云なく示さんとするにはけり
ほ意し才智の優劣は千差万別なれハ我愚に
も劣れる家の子弟らに示し且ハ自らも戒むも
事とかしぬ中々にもすてに先賢みて及されし
ほ前重く又ハ記し尚なすても所才歸ならん多からん
又明君賢臣哲匠達士の示し置れし確言勧戒所とハ見
聞に任せしものかくうつしとゝめしかしぬ出その實

政度の事業を起せしかば仏教と日月逆しうす
師老の中比全き仏法一炬の燈を暴風
とやき失ひもしくの如くなんとも烏有と成り
亡ぶる已の事なり国居しても亦の言葉に仲の
書の事なる事なる任するもの心如しる規の民族
と題せしは家家の名称御せし古と成るかり
つゝ天地古序の形勢開闢するは世界うまれとい
かるものは何地の国とも自然の在りかは同しるか
り風土といろ〳〵の如くの地の産者生土風俗
者へ生人情は殺しもれる産するかり物と
陸けるかり人は教〳〵国は治めの在を異にし
事り善きを進るとも悪しきを遠ざけるとも
これは名つけて五常五倫といゝ孝悌忠信といの教
云事をいろ〳〵ちのひ仏れと皆同一筋かり和生地の
在を四季の序も遠ハさるかり仏のも亦くかるとかり
人〳〵のものかるを従も必ず和かるるかりきるを也
教へて佛の佛の神の生を田とい（とも其教法皆
天道を主とくるかのれといかる帰す云をかる顧みて
天地のかりハ在るハ仏ら在を亦かるを生の在を非
ら生亦くかるの在れるを養かるも悪かるも混雑して
りて生中和〳〵悪かるのハ仏多く遊民〳〵おかるを生地
の在かり〳〵れハ生かり〳〵生物人生といハ聖賢達士
ハまれる愚者不肖者ハ多し男女男女婦
ハ亦生少く他夫醜婦ハ高〳〵あし鳥獣草木の微よい

言まことの用はよく〳〵嘆稱し給ふ事ものは
少く尋常一通りのものは為きなり古れはかくはらき
れは天地万の用なりうたき理りはもこのなりの造
化しかけるなりこのはしきものは多くまさしきものは少
き形なりて皆ものれく去るの用はなるは生るもはれは
なりはれの面まもの聖賢明君と呼はるべき人と中庸理
をもとなりなる点なれもは教へうるはは見れを天庭は
無なるものは人と必ずを生なりはは豊ひ生無なる庭理
は背さるまなるとは人は教たり来れを世界萬古
月月運行昼夜の多遠をかく寒暖温涼時と差へぬる
お顕彰する所のものはは立ていは立ねば生教生法立され
は無なる中まなるなりまといかの祝先ッ人のうへは思なる事

はなる賢愚は自ら備へたるものなる中〳〵変化を
ならぬ筈なりこれは細なる論まれは又稍〳〵差別
なり手はつけはもは生ずるべく善人君子の居を得る
なり世話をや記ても墨見は加へまはうつりの
ね悪人小人といやしめらるはは又まるは見は
きるもきしもれは面の悪〳〵はしきもの悪しもまは
移へまもは化しくはしまるうつるもは〳〵いろ〳〵天
禀多きの中の中善なる悪なるは移せはうつる為きもの
極めて多きなり性者聖程の教はまるは中まはを
やく洞徹なるなりまもはまは立ていかは法は立ての善
なる悪なるはうつせは移さるもはは教はるたはまはしなる
仕なる左なり初美質を変はるく教は待ずく生立

ちはしきるは見安しもしかるものうるはは傾のすた
はきいて性為生徳はの聞報するはく又主と悪性はう
けはる言をはいうをふの生云はは流れしたるしすると
厳戒はは加へくるけつしても善るは移りう事性いは悪人
といはものるかりうるいまりは清宜はは業りは重き
は刑はは交るるいさるかりは日理と諸載の聖人は上智
と不愚とは不移とのたまへくをかく知りはられしもこの
二つるは論かく善るは悪るはうつさるべき教あき人
くさらはは善きのうとるうつを変き若る立たる法と捉
かりをれはは悪てかしるは教へられぬ者る天地の亜智
かりる法ひとは教へうるかり深層氏は主地万の人
彗流生愚者のうい多きるはうく見抜きをり彼

の如き教はは若て若るを見四具眼とはは若のれ
とは儒は仏は仏若は日教は日若うつさる重き人を
のうはは孝く若る設は二をとはらはるはは上
智は不愚は論かしとはは時は主教うる重きをく
教若しぬう若かる色つらく愚かは天地の若を先
はは悪きをのを多く生るる主地の若かりはいうるを
かれは賢智の若かしこき人のを多はれはをの賢き
をめる使り人かく中世界若と様るの日月はは色
のうい満世界若自るは英徳上下の差別かく日をの
生計はかしを主用はは弁するるるを主若し智者
の若するるは高しを少くは愚人のかをを重るを多き仕
新りる出来こうをのかれはかり君は主人若下は教

人ありて主臣の間みな長臣は数多く部下の小臣歩
卒おは数十百人ありこれをうさんは貴用なし
の左きは以てありとれの（主地の造化は同じ世話な
れとも主きるは何しきは多く出しおくなり物多
何りさあのとの物四（人生世態のう（ゆ中なりと
行くなり富と貴きは少く貧きと賤きと多く男は
まれる不遇は多し何言は少く失意は多し憂患は
多く歓楽は少しといの表裏表と数くまは常
と少く何しきは常なあきなり中主地君の主の
多獣鳥魚草木虫玉石とい（とも皆物り珍禽異
獣は少れとしも鳥獣なりといの話を多きなり元
と獣とといり良獣少く悪獣多し食穫とあを亀

きの肉も美味のものは少し食ひて堪（ぬ）ものを魚
鳥をいり啼聲は愛し美羽は貴するものは少く
瓜虫のを多し食用とあすを亀きし鳥類も赤珍り臭
も鯛鱸皆の丹美は少く鰯鰯なんといの表多し
草も木も布用し良木良材少く樗櫟の雑木は甚多
き処金銀玉石も用し黄金は少く銅鉄は多し珍鏡
なる玉石は少れる礫となる頑石は多し天地造化
の何りさを玉くく生しまは何少く生するを昭白
なるなり叶すのはを天地世界古今甚用なる
を生ものとは何れはなり天道直しとのを左七多るは人
間教る左なり教身不肖なと性意愚なれとも善

まれ悪まれうつる事なき中まれ在るものあり驕てまきまの
しまうつりく一生ぜ全く終へんとは欲する事の
なり

○
はあ人いらくうけのいのまきし人まを公ゆるを有と
いへし又はあ人なまを任せまを公を書き
あるかとうけうあ人まを留主をたのむまをしとは記二
流同理まをげまさるまあり事なをたまする人いあまを
色失ぜ仕出すあり初めまくを仕遂さる公ゆ能く人意
まはうくうけのい意てはすまるあり軽諾寡信といはも唐
大和同しきし更合はしうん人にを祈んこ祈まる事は
託す意しを仕とけはは有ゆぬといはも公まるゆしもめ事
合のはしきも也

○
茶湯の老侯上杉前弾正大弼治憲公を賢明の名を
重臣荘戸九郎左衛門源鵬が集めしる翻楚篇といはる君
の在位中の徳教ぜ記せる書ぜ讀むを公書を臣下の
帰物ぜを献上をものは軽きまを事とをはらくき謝はは下を
同士くの賜物を形はあ宜品を未の満足あるぬまは
はらはとも善意し員ぜ居せる品を贈らるれは至
公をのいあを入又去度の接待をのあと思ひ者
苦まを公をかけく安のはは意を人は鈴はく魚をを二
三ッを持来るきのをつりはるかんとはく或を接園
の野菜摘来く手作の品とて接待の如
の真実思いやられて去はらくるを品とて接待の如
在ぜすを意きまははりされを苦まを公をうる接まを

ゆらされハ血を故て易きものゝ様なれ共其実を表
かさうして贈れるハ上なく敬せる誠より其血性尽せる
を和表ものかけれとも其血支せるものゝ如くいたて
へやをうゝぬかゝ凡の人情男かまゝかるまゝ血陸らに
血を任せぬを我慢のたへぬものゝ凡ハ能和を好く
贈れるハ元より色ゝ男か信の贈物かるより自ら誠す
而かゝしといかゝ凡より又ものゝと思かゝ凡の誠を失かゝり
血を任せぬ些少の贈物をるハ至些少かるの誠慮より
又ものゝ贈りたきといかゝ凡ら凡す至人の誠を海者
ますを表をのゝとのゝ面ひゝ

○

世変の才智るものハ療治の事物を手とするゝ人ゆゝ
凡ものゝ何の重き欲世渡りを凡ゆ人なる才を病作をやや

見への才識ゆ重て其方を運用をる同しものゝ

○

病を何病をものを人病ゆ先きすゝ其此身を備りを
ものを見ハるものゝ中風や血重きとかすかゝといか
人極めて不孟病をやむ狂乱かゝ重き躰を人かゝと
見ものゝ必ず失心病を患ハ人を骨格をものゝ
知りゝかゝ也常に平素ゆ熟察しかゝハ程知りゆる
重し又性我を不慮の変かゝを元気充実なる時を
かきかゝ何ものゝ義さをゝ凡ゝ物業の何ものゝ時ら
酔態多房接かゝとゝを程狂惚うゝとして義の
をかゝれゝ何ものを能ゝ怪奇何やすゝいする自ら
義を油断の如なるかゝ言語の本のかゝいまゝめゆ

この頃かゝる氣の変なる時を厳酷の暑暑なれば狂されす
種々の怪変なれ共はぬなり

○日は二十里三十里の遠路する人の咄をきくに皆々性
質善悪すれども多くは遠く道に氣を油断せぬ
事なり悪人出るくらい居ぬ事やめるを非らず也油
断せぬるくるものと思ひ油断とする故に物盗出るもの
服見せを先に休ませ行人車馬向ひより来るを待合
遠くより見やりつきはこらぬなるの先より付て通
る也行はうとも服へたんと見うけて傍を走るといふを
度々はなと記い至時々也轉くまるの人を多賀とる也
加はるこの家は発すると記十分に食事をなし居くまて
飲をくいはせぬなり又秋虜まく赤飯を待来する

歩卒の物語のよう民屋を休め居屋床をまもはなけは
居のもの居くなりもこれは面白をは行けとも也指
もも居加はりなりこれは休め居屋はいをき又とり
うの〳〵はまく素はかもとなりこれも面白き理なり
又はなる人居を勝を行なき居もはなるのこれはくと記れ
ぬもこれ又面白し

○

岐阻は旅はせしも記馬奴のいしはは人を故居なるれ流
世は乱れ女房なれこの三つなるれは必を身を保し
ぬるはなりとはいなはなるこれ出もしるや歟但といへは
雖とやいはは

○

世の中乃幸も幸も深く意乃意を不幸悲
もなるれ不幸中は幸中は石幸も半居

定め玉くゑ玉くゑといふ人多くけまや

○才子と称せらるる人多くは悪人なり善人と呼ぶは多くは愚人なり世話はいと利口らしけれどもさるかあくがつとめけれぬくみと才徳の人は多くはきなり

○狂乱血ちのひとい（る病の条は乱心二十四通りなりと いふ一人なりしれる中の酒なり起る乱心といふなり酒と いふものは一ツのめは うゑ二ツのめは 怪うゑ三ツのめは 酔かなり傍の在る人迷惑酒はよろしといへいやなれぬ といふこれ乱心の始めなり

○恐るべしとも 情おそるべしとも

○ある人いはく我父の遺訓なりも君父師長人なりも唯されぬ事はせぬものなりといふ事なり 我是を博奕淫行等はとなり

世諺云一杯二杯人飲酒二杯三杯酒飲酒五杯六杯酒飲人

なりこれ見聞人は我なり出るなりといふ

○ある人度費のはなしきなるべしなれども先は位なるべ しいさゝかの事なりこれまでいとぬけ抜りぬけ全く 博陸けしと 滑しなるべし 彼多なるかり居く度費なりしく一旦はやまりしといふ 時は はやまりなれども 抜らかしておけば 云さるかし 一時の恥辱をかくしまたちをおはひつゝみ れくまきし ハ云なりなり止時なりといふ

○全はうはも 玉れいさるの 悪実は少しのなりとおは 思ひかくしては先きまも知れまし こゝひめはらはれまと いつしの癖といふものなり 後の恥といふなと忘れ

なを度重る程公物とくかりて法いをを盗ひ出て清摩
ひ受け甚しきに刑を蒙りこいとる甚元といさてゝの
るかりとをおほひかくせしくせの長くなるかりの
○
或一山の住持なる僧をの因縁の妹かりしもの田舎より
奉公の為とて江戸へ出て尋行しと紀和めしい人を伺
ハ、盗と思へ火ひ見てを火をすと思へ必す油ひすか
と疑せしとし又排師巨山といへる法師奉る世
の中れ人を盗火を火をよくを如をのよい伺てうれもせし
○
或人宗旨法師を問ひしハやつのれ師を後ひ連奉の在
伺学ひを教事かれとをいまさい師の教き教をいさら
す秘を睦とり〳〵るるをを師のハくこれを而しをん
るをといへれハ法師の品すきをとをこしし世語

よいか教ふを物の上手かれといへ言かるを
○
三平宇平先生婢如伺呼ひくるかの蛍のれひをを
等伺貴く出せを席せるを耳伺ををを呼ひ通
を伺侍居しを来ををを伺をハ門を言をを手ちるを半刻迄
の来らを先生を別限をいてをれハいをいをを
を婢伺俗〳〵ををいまを賣来うを〳〵ををを
を待をひを已を来の別をいをれを来らを先生を
洗茶飯の三を〳〵さを屋をを屋しをれハ下如い〳〵をく
幾人ををかく呼ひ来をいをを賣屋を来をを暫待ち
をひをいハれハ先生いやををやくめしを出せを
茶つけ二三椀を〳〵を呼ひ来を

当時押切今暫し待まひのしとやせしとのとい
ふ九の天の知ハ人の知らぬ所なり待
しハまつ石と云ぬ事なり是れ高しう〳〵しきハ所
らねとくひ拔ぬ門ハいかハいつまても来ぬなりといと
れしと人世うくの知きる事ハ何事なりの
黒田如水翁の壁書なり法華人の見せしと云
ふ録す

定

一茶ハ挽ものハいのなり静ハ思し油断なく清らぬ
ものハ汚きものなり
一茶碗皿あるうつき石ハ拔こ度と洗ものなり
一座の湯一ひしやく汲たらハ又一ひしやくさしさ
湯のこ一切しるく並のやう当座茶碗ハ仕習教事
故秋流まてハなくハ利久流まてハ習能く者しのやうな
物ハ人ハ多くハ静ハと思ハ油断ハ多く滞らぬと
おもハ〳〵世ハ義理ハ自ハ知る様ハ教ハ各生ハ得方ハ多くハ又義
理ハ自ハ知る様ハ教ハ敬師ハけのれ者ハ又主
親の恩ハ主ハ朋輩家人ハ主の恩ハ能ハ多く
ハ主ハ主恩ハ報ハ思ハ忘ハ能ハ神仏の罪
ハ知ハ知ハ様ハ右三ヶ條第々の湯水の上ハ能
多別ハ多の書分ハ也

慶長四年四月　如水

○

水戸黄門光圀卿九ヶ條

一芸ハ樂の種樂ハ苦の種ハ知ハ多し

一主と親とハ主従ものとおもひ下人を生らぬものと
知り申し
一万種親と思ハ不可紀ものハ身ハ遠くらく近き手
本と知る事
一掟ハおちよ火ハとちよ分別おきものハおちよ
見ぬ所ものハ不可うれ
一朝寝ハ申ものハ吐の長堂ハ申ものハ
一少ものハ分別せよ大ものハおとろく申ものハ
一欲と色と酒と博奕と知る事
一九分ハ生らぬ十分ハ出可申と知申し
一分別と堪忍と知申し

徳廟

大御所様ハ御近習ニ申ハ
一仏ハ物ものハ仏ハ仏ハ申なく家居ものハ物ものハ時ハ
仏ハ広く體胖ものハ
一仏ハ我慢ものハ愛敬を失ハ我慢ものハ仏ハ
愛敬ハ
一仏ハ欲ものハ仏ハ仁義と思ハ欲ものハ時ハ義
と思ハ
一仏ハ加ものハ時ハ稽古なく却ものハ
偽ものハ
一仏ハ奢ものハ人ハ侮ものハ奢ものハ仏ハ人を敬ハ
一仏ハ我ものハ仏ハ人ものハ我ものハ時ハ疑ものハ
一仏ハ偽ものハ人を欺ものハ偽ものハ仏ハ

ものゝ

一仏は邪見なる者は人をとゝなかり変なる者は人
の為ゝ

一仏は貧なる時は人を猶かり貧なき時は猶なし

一仏は難なる時は人を猶かり難なる時は言葉なけしいのゝなき者は
恥はらうなり

一仏は堪忍なる時は物を破る堪忍なる者は幸
なり

一仏は人なる時は仏静なる者は仏きらなる者は
仏静なり

一仏は勇なる時は仏静なる勇なる者は仏静
なり

一仏は自慢なる者は人の善悪を知らず自慢なき
時は善悪知る

一仏は ゝゝ なる者は人を崇む なき時は崇るなし

一仏は癖なる時は短命いやゝのゝなる時は短なし

一仏は誠なる時は多く安んず誠なき時は多く安んず
ずを

○日向なる国なる諸侯の大夫嘉なる人なる仕かとの
臣役となる者臣人を召抱ん大坂乃参府表は在る
をれなるゝゝいゝ越もしなる国地は都合なれは人柄
実斯なる筆達者は智恵者は人なるし撰ひ
くゝゝ越しられずとやゝ生なる仕なる

右博多辻堂の人を為所まとい皆旦那まもりと五文
〜うりに成い其ゆる人恥らひ感服せしとや

○ 云ふ〜と見あるらいゝ出せる物ゆゑ何とおく味ひる
上手なり何ゆ一文不通の筆い〜なるきくるまちのひ
多くも出ちこる世の中ゆうといゝなるよりをるゆる

○ 何る人生子の家業ゆ性出せ〜と教られと一通りハ
間に合ゆ出来る為人子清ゆる為多才ゆ見へゆらうとれ
ゆうる為ゆ遂ゆ性出さいても済む人多きと見る
為へるやといふ

○ 享保中堀川汎の僧生桂川定助と為らんいゝ人凡を道
る為すゆ恥脆のいる為と云〜ハい成就せぬものと
いふこと

○ 又生人のいゝ〜業者諸書ゆ渉ら為ハ為ゆ子史百家
及ゆ餘の書云ふく讀うちる生員〜に論孟為る
生ゆ〜ふく熟讀すゆ左為ゆ時ハ難駁ゆ為ゆ自ら云
行の間ゆ業間〜も不人柄と為る人多〜といふ中ニ話
為ゆき時清菴先生物徂れ〜と片ゆ云ふとめゆ

○ 世ゆ再ゆる天狗といふ物ゆハ鵬為りといふ古れハ愚
痴為者の山伏修行者の草湯殿阿黒大峯等へ登山す
為ゆ深山霊場ゆ生如ゆ天狗ゆ〜んといふ物ゆ性ゆ
身持不慎ゆ業ゆ何〜きものハ極めく古れゆ掴ゆ
又さらハれる為ゆ為ゆと云〜ゆ為ゆ為ゆ怠ゆ
為ゆうゆ〜といまゝ〜ゆを捨ゆ大先生ゆうゝ為ゆつき
数十人猿貫〜て攀登る時ゆ〜て彼鵬山ゆ岬ゆ聳

（出こる巖角のもとに休ひく人の登るを見すゑ居る大
先達ソリヤ向かふぐひんの松のかせぎといふなり仏は隨
分山伏等迷れ出の夢中なるかの一聲を経文の
唱かとれの中をハ〳〵額付けけく向ひ見面れハ彼画
まを覚〳〵嘴尖り翼なる人額にきん付いて紅下ハ
たちつけなをきいさるなれ見る古れ天狗なるなら此鵬
なりきんと見るハ額上一班黒色の羽を有り翼を
とゝのふなる毫きい岩の股太く脛の長きハ載附
着なるなるを見るなり古物性難猛なるして猿猴も人
類も攫を取り食ハ登山の人大難まてさる法なきを
なりのなれハ彼もさらひとるなる能ハも若獨り立ち
くをなれ〳〵る登れハつるのみとらるるなるなれ古れ

世ふくひんはさらハるもとハい、情人（雲形を坊の内
さ毎を見〳〵覚こる西ふ男ひなり〳〵かくなるものと
西ハ居なるなり修行鍛錬の道士を固ふ古れを知
れを為智所西なる山伏等を戒しめ勵むる者
めるを中なるハ決して告知せるるなるなり中ハ本廣乃
宮岳信ハ大峯流の大先達なり一真坊かくと称
し阿闍梨信義なり
○
酒を酔ハ本性を失ハるなるなるハ
何しも何ラウすなるハ酒を猛ハ至人〳〵の者なハ
やう異なれとも西西〳〵きく人を爛猛のなるまを持ま
（の西〳〵き者をなつすなるとのくなる多く者ハ家亜
なる酒なるしも内西なるハ不西妨邪を為を酒の為める

主人性行はらいす多し失ひなとはうらもり
なり

○いつの頃ろか主ゝん者ル老人の御ゝ江戸西久保邊
の何る者か数十年来せし僕ゝ実直か
しもいさゝか無略なくも勤うと廉潔なりし主者まも
連数か如ゝ忠実に諫言ゝ何ゝ主の為ゝ
主の為ゝ奉仕ゝ間間ゝ何ゝ主の為ゝ者か
主ゝ為ゝ忠ゝ心ゝ者僕ゝ何ゝ金ゝ為ゝ
言ハ指出なかりしゝ主ゝ僕ゝ主ゝ為ゝ何ゝ主ゝ為ゝ不
当事ゝ為ゝ出し中金江戸ゝ何ゝ主ゝ為ゝ者なか
りしゝ聊の幸なり我江戸里の田屋へ携へ行ゝハ
主ゝ為ゝ田地ゝ買求なんとしいとや中金我里へ指

行く踏ゝなるゝものゝ時へとと思ひ分し一筋ゝ
の奔へかく故郷遠州へやらんいとゝ
なり程なく主踏なるゝものゝ門ゝ入ゝ者ハ孫ゝ
夢の如しく我身ハきのふ主ゝ為ゝ
うしゝ何ゝ人へ主ゝ為ゝ者ハ孫ゝ
何考へなハ彼十五歳ゝ主ゝ為ゝ
魔の入りなかり主ゝ為ゝ携へ赤ゝ
ちくゝ恥しくゝ主ゝ踏なるゝ物ゝ
いとゝ天ゝ為ゝ何ゝ江戸の道ゝ
主ゝ彼主僕ゝ為ゝ質扶なるゝ主ゝ日五帰
らぬハ定めて主屋ゝ為ゝ
主さんなるなるなり何ゝ書ゝ何ゝ

妖孔〻の何なハ和のく〻を狗七みをものよさらハ孔の
ゐんとを而ゐ方を何尋きを也うらのしる在せみ祈毒
祈藤と大ゐいなく〻ハ駿郡〻も至なる西へ彼僕息
何つきし何ハ七生立ものへ日しゐ孔いなや性の〻と在持の
虎百（玄門）矢庵ゐ和尚の胸くらけをり掛引く油断
なる在持のゐ秋ゐめき下郡なを仏を也ゐし叶
大金を東五ゐハ者〻ゐを上のゐ秋叶金何見るより
仏ゐ魔の入りくまつのくの在賀なり叶のちハ沖めく
孔ゐ油断なし〻ゐ加ま（も）〻秋の助ま也愚のゐ
ゐ下郡ゐ仏也ゐ〻ゐ秋年毒也何性を也身ゐ
金といゐ大藤ゐ目ムれ仏みれれ玉れまもの西西何
多の源となし童愚の印寺ゐ掛共何ゐけを也ハを

身ゐ刑何毒ゐるゐいる馬〻とゐ加郡なり〻とゐいゐ毒
とをいいく和ゐゐ異見せ〻〻とゐ〻彼ゐを性の西
質君ゐの恥毒き而なり〻ゐれ人ゐゐゐれを下
郡ゐ仏ゐ〻も笑と招き〻を也仏ゐとゐる毒き
話ゐ〻彼兼好法師のやつこ往て〻も和亜毒ゐ
住ゐけ老ゐゐ〻ゐ大童門義ゐの金在十九ゐ係ゐ
門ゐ掛ゐ加ゐ〻ゐ火ゐ和ゐ〻ゐ下郡を愚ゐものと
知ゐ陳と已ゐ古賢を下豫れし
仏ゐ油断ゐ未毒のゐゐれし去年年の在藝
ハゐゐものゐ〻と既ゐ祝きし去年年の在藝
仲ゐ星祝良悦祝〻〻〻十年去ゐ〻ゐものとゐし
ゐ巌（イツク）ゐ人集ゐを至ゐ〻住地ゐ〻賜〻舟海〻

せしを紀藻津といひ和歌山より出せし船大風の為に海
中なる破船に乗り至りたる廿日市井口村といふ
所より助け船出せしが古れば逆風の為め動かざる
ありしを此の中井口のものは五人多く溺れ僅へ
残らんとし来れりその中僅を乗りて僅も
うつるなかりし時何れも立ち帰りて翻しがたし
大浪打うけて引き戻されしに海底に死失せり
溺るる二三人を岸まで溺きたる人多く上陸
せしを助けんと溺るるものもこらき出来る
うちはのかりを主ざるものかりといへり死失せし
ものの僅に見つるなかりしと云ふなり油断せき
しかへりなり非業の死何やうなりは是

○

ことなるもとまるべく報恩を為すべき
福善禍淫とする君子を義とする指すべき逆ひを去しいへども
今世善人を多く不幸不善人を多くい幸何ぞ仍
て善悪の報ひ合わず申況人を教ゆる中庸を以て
誘引しのたし書経を見る処に聖人民を教ゆるの
しめを福善禍淫のるを第一の仰られいを以て
ゆく合ひ仍て世を善悪の報ひ庸中を
を為とやいへ新井氏より中を出のしの人の風
仍朴なしも異なるる仍て善人を一筋の善の悪
人を一筋の悪なるる仍て世のよりの善悪立ちたる
事なし假令人の生れ合せ悪病なれい悪病み立ち
病なれい実病なるるよりて業のきしめ仍てうめ

然見るのみし序の世の人を善人といふを悪人
とり悪人といふを善人とまゝ風体のさま
〳〵かゝきたることゝ人の難病乃病のごとく畏ると
おもへ人に実なる処を実なりと思へ人を
難病のごとく業のきしめ見へはきくゝと思へ人
為らねたると思へきくゝ也技ども畏なる人を
畢竟ゆゝく実なる人を畢竟無なる人を
為分の善悪の験なるゝ見へぬを大難病の業の
きしめ見へぬをしとしめもし見ぬ面白く為ゆを
生元なる居や内虚徴ある事や者も

○

岩田孝作とや者自為の舊友なるく賢なを好を
ゆを一見識なる者なるく片なるの立居を表しまの

将此やゝ夫を異論とやゝの序を人をしゆを白石、折
衷の世ともを先年新井氏甲府を伺う毒人附一日味覆議
をしゝ孝作やゝを天道善を福し悪を禍すとやゝは
（とも善悪の報ひ一ッも合ふやゝは夫を立居とやゝの
立しやらるやゝは夫を知るゝ人疑ふを来ゆを知ゝく行完
和すり人いる者善が訪やゝ板ゝ報を如を如けやゝ後
るくゝは長ゝく已ゝ為ゆの立るを福善禍悪の説をゝ
一向を捨ゆを已ゝ修行し又人なゝ報（この所を達ゝ性
ゆつるゝ也ゝ此を市学を移やゝゆを聖人の教を天を福
善禍悪を作ゝ為ゆ事仏氏の方後ゝ為ゆゝやゝ後るを
ゆゝを（を立居を為ゆゝ片人を賞を行やゝ
不為ゆ人ゝ為を罪を行やゝゆとやゝやらゝ為ゆを為と為を後

とは為第の者却る罪を犯せし不為のもの者る者と
及ぶる毎にもてしに正理なるもの不為もの人
者る者を以て重し君を演へ時を
為るを責なり不為るを罪なりと中道は元より
為長の仙者を目のけ為を作しやもを者る勿
論なり（とも君をも犯を者に罪を罪なる道とや
而るを云のく書らぬ者も岩田る論場もしを観
過知仁と中道を善悪の如を弁中事暦
人の教いやなると教を中論をやがしゆを至者の
所きを知れやが新井先のやは中者作を此
程元但る者（喬知叶時 印者の
為者（とも分と其上通鑑綱目義者をは毎度少を

中ずしるを移を程母きを而をしは移きるをを
布二條嫡嗣は流罪や出を
故事を重義を播る時昔のをくせよとや掃除を
目の前は掃ますみ（ずを第けよは
教邪を却と却といを為るといを重をを却
いを八異癪痛を何ら法物を腹のいを出者をいを
小児の舞癖をかんの却を却きいまくく新
却を却けを為をを仮を却のをいといを常者をれ
ば却けを為をなんといを何るるを舞（知らを先
のいるを為はくを経行先期腹痛するをつき却と
いを文意却とといるを文僕はを却けつく
といを文いんをら却きといるを文偏儒恥背を

せるを、といひ、古れ又脊の病といひ、事なるべし、諸説なて
諸病の名付つくるの風俗は、中風痛風喉風の名
皆病といひ、事なるを、これ風の大義の事なるを、
もの也、病の名なるなせり、又別に中國にも如
さわるを、しらかたんせぬなといひ、事なるを人とも
勝義性根なといひ事なる似て一すの如しなる五分の魂
なといひ、早詩より魂の字を如しといひ、事なる
秋國の古を綿といひ、もとの如く生ましの種とちの
の種は麻布の服なへれ衣となせり、古なる古れは種
へれといひ、序新綿を二種なるなち上は布糸綿と
称、組なる二種なる古服の中なる丁なるを芭蕉と
いひ、これ何なるけしと思ひしなる古なる古なるいひ

元吉作延

種へれの遠祖の轉せるなるべし、又を如し人なきけ
なるを、なり伝説なまもは、今なる布函とんまは
古なるやの種は入れなといひ、古なる芭蕉なるべし
又奥の磐井郡なの民商なもあるなるなる麻草は
つり古をけいなる、はは布
は麻布の服衣なるなとも入る古れは芭蕉なるといひ
麻布は古れを見なるき似へなる序の綿は
草棉なり古を元暦十八年陸奥なを海しを古種棉
農日本紀通稱なる出へといひ往昔は布服は績し
麻布は織り衣服となる日本紀しなる序の蝦夷のアツシを
のぬくもは先哲の考証なる彼西洋布を古の
木綿なり古の木綿は中古は蒔生せを草綿なを

ありあるかれその通しも本錦といひ本錦ハ和蘭ッツー
シといひ古形まこれ印古錦と稱せり又錦布印和
蘭ともレインワートスワーダ」といひ我國錦ヲワタと
稱せるは中ワートの轉語なるべしと往年中川濠菴
いへりき

○

から紙とは紙がらの至る紙といひまるしからとハ
體舞
から舞のからうまも形貌のまる事なる紙がらとハ紙
の形ちの切るといひまるしまた人柄家柄稽柄かといひハ
品類のまもも出れまりもの模様をいひ
まもも同意となるあり布產拓牌ま唐紙と切るは昂
ち中のまるみと見ま唐土ま渡れる紙まり切る紙
印からと訓ものまるまの切ものまるしと名古

うりさるなめまや地產紙とかくは和のし

○

うりあきなの肉まは發乱なし立れ鰻鱺ハ殺鬼の
切なるまへなるべし貓の發ものきまる鰻ハ切れハ去り
又往年業蔵の魚付こるまし鰻ハ切と畠のまて薫
しれハ作ちはけまといひ話りきまり又發懼產まて
ハ家内病癒印進るまの立なし堪氣印稀く性効の物
第の家ハ滿るまへまや出れ又同なの話なり

○

作疫の瘡まもい影く牛印蕃ハ他國濱又數十の
牛印船まし越後の出雲崎佐渡ノ小木十八里まて渡す又
赤泊といひ所ようり越後の孝泊といひ所まるまへ
中ハ十里牛ま印越後の濱より佐渡先まて
陸へ波へつま渡まもといひ牛ま印越後印貢

佐渡（かく）沖（へ）流（ながし）出（だし）奉（たてまつり）し所（ところ）荒海（あらうみ）
きのまの礼（れい）せしなく初（はじめ）て新潟（にいがた）の湊（みなと）へ戻（もどり）
陸（りく）なのるといひ高野（たかの）と以（もって）石上（いしがみ）四郎（しろう）嘉（よし）す
性（せい）の如（ごと）なる上（うえ）隠（かくす）意（こころ）高（たか）れハ主（しゅ）上陸（じょうりく）せし動（うごき）ハ
決（けつ）して人（ひと）を刑（けい）損（そん）せしめし至（いたる）所（ところ）ハ悪（あく）者（しゃ）といひ四郎
の性（せい）命（めい）をすてる程（ほど）なる故（ゆえ）なるべし法上（ほうじょう）も船（ふね）より降（おり）せば
直（ただ）ちに帰（かえ）国（こく）の命（めい）を蒙（こうむ）れよき出世（しゅっせ）なれ流（ながす）罪
りなくなるなれども自（おのず）から観音（かんのん）寺（じ）他（ほか）の国地（くにち）へ上陸（じょうりく）せ
ざる由（ゆえ）なりとぞ

○

諸（もろ）〻の技芸（ぎげい）を伝（つたえ）ける人（ひと）の初（はじめ）なる故（ゆえ）至（いたる）て貴（たっとび）
ならるるなれ共（ども）其（その）本懐（ほんかい）なるべし其（そ）けれ共（ども）人（ひと）の初（はじめ）
なれ共（ども）世（よ）にいかるるみち有（あり）るる

有（あり）なくも其（その）知（しら）ぬ人（ひと）も何（なに）となく感動（かんどう）する
所（ところ）なれ賛嘆（さんたん）なる所（ところ）なれ知（しら）ぬ人（ひと）も知（しら）ぬ人（ひと）を初（はじめ）
が不（ふ）ん思（おもい）なれ絶技（ぜつぎ）なるべきハ至（いたる）所（ところ）至（いたる）
すとなりとなれとも其（その）何（なに）なるかハ知（しら）ぬ
ますまハ知（しら）ぬ故（ゆえ）なる流（ながす）なるとハいひ
ないハれぬなりのしかも神技（しんぎ）といひべし

○

都（みやこ）の人（ひと）ハ唐（とう）情（じょう）なりと国（くに）〻の人（ひと）ハいかるなり
ふれなるへく唐（とう）情（じょう）の人（ひと）のこ多きのなるなれと
俳諧（はいかい）とちうひ人（ひと）きし地（ち）へつきなれ共（ども）ハ新知（しんち）旧
徴（ちょう）日〻月〻に加（くわ）へ其生（そのいき）行る油断（ゆだん）なりぬ土地（とち）
ニ有（あり）なり要用（ようよう）なるすに性（せい）まるとも（ども）豊（ゆたか）なる
旧徴（きゅうちょう）なるとくなるすなるへく都（みやこ）なる在（ある）人（ひと）の己

すれば出さる所なり。田舎に素朴の人多く旧弊なる
事なれば自ら交情厚く成るなり。
○
術藝の修業の人十八九の時迄は肝要の時なり。此の
期に勉強すれば必ず進歩して独りの藝の伝授に留
まらず定めといへども中時に自ら発明する者
あり。等閑に成り上手若人と呼ばれ老練して所謂
功者のつきたるのみなり。生涯の位を已に世に出
業を定るなり。素年十八九の時に勉強せざれば
すでに緊要なりと高谷といへる画工語りき
○
某といへる料理人を始め梅吸合せといへる料理
出れば始め和蘭油の料理なり。然れども何料理と
定め難き調理なり。必ず塩梅の味を知らざ

徒者といへば一ツくは吸合せしたる口内の諸味の餘味を
ひく事なり。味を得ずして後れ出れば和蘭油料理なる
人といへり。術藝は何事なりとも知らざる者なし。江戸新川といへる所まで酒を
養先生に授られし頃。江戸新川の酒を知らざる者
試るの法はまくの如き酒の種の酒は一ツ口に含みもし
くのごとく決して飲むべからず。一ツ呑くに味
多く知られずとや。因りの法なり
○
世に癖やみといへるものあり。此れいさゝか癖なり
又つゝる癖なるものあり。潰瘍なきまで成るなり
此れ必ず人の持ある癖流湿毒なる人なり。予既
傷せる婦人を癖元は〳〵なるく又鉄瘡の法法を施し
〳〵を創口を〳〵なるとき切抜て〳〵まで〳〵切時味

これは何れも温毒の書きくまして手を抜て思ふ事を重ねてするなり

○

余が大平南一番都度南と名くる病なり是は都下猶多き病みしく諸病なる事ひまらさるなり

古此病驚嘉徳く癇癖癇積癇病なりといふ何なるかんちやくとなり嗔疾病小児なれはだれやすいなりと

いつの古へこまれる色彩なり大きく病なり熱なり考なる

大平日久しく身體の労苦ハなく惟思慮の労のみなり生男女の労といつも多くハ飲食色欲何貪んとする日の大徳と活計の營利何成めんとの思慮なり

固より生徳何遂く重きしる何らぬ負賦のものとい

とも中都度ハ住居するものハ耳目口鼻男女色情

の徳より家宅衣服調度ハいうまて見るなり

なく用くる事なき故に新つを捨ハ出しして

日何遂るもの自然ハ和氣擾乱の因となりて所謂かん

ちやくとなるなり生徳何遂出しして蒔きた

る種なれハ生なり稼ハかんちやくなりとなり

の出し氣といふものハ生もすれハ又耳目の

調見まて真の癇癖癇積癇なりけく重きなり

溜となる天下の列侯諸なる名く中癇病なく老く因病

なくまるハなし是自由便利なと長なして大平の難

已なる何ハるなり云何ハん人ハ者数なる重きし

なるなり是れ何数ハの異者なり何れとの変易なるなき

○金奥船はもと支那の俗語にて船を云うなり奥船の
唐の船なるを見ては雨海なるとなし時なるを天あめ
らんとなる附は日河路きとて仰き奉る
ちれ必実微をうとやや
○ある藩士人鄭恒琴之介傳者と後程程に下関なる
朝臣うたはせて三つ手をハあつらをみひをを
へられる是は使ら四をあるとあうはをといか
ゐを神しも方くみきこしるを人程を程をす
しも琴之はをれるやと関ア鼓ほうき手も
鄭恒をいあつらせるかしとをきれる人の
ををる而をあけ給る而いをすしもあらるる
ハけるもいとし池是へなるしみ清云のいる古人の

あとにあく古人のうしなへるを議をる安く古人
の至而を居く古人のるを而をハかへしと切る第云
後の代のうをみるへ
○あうしは国の秦婦人とやせし人列女傳列仙傳は
ある人のたちまち出し見せ傳を至第は皆覧へも
初とあ〳〵へられる加石とる人なるいさしら
石うう時うるのとめのは者をめあ加を人をきしう
けも諸人の智を加るハまをと大智と見あるは教ら
れる
○張南新書生四要め
思ひはすくかくして神をやしなひ
欲をすくなくして精をやしなひ

○ 労がすくなくして力を費ひ
言ばかりして氣がやすかる

南國の若藻のいもくく
欲の者なし 況をや男女和合の氣を積
氣といハ氣が積ハ精あつまり精あつまれハ形まな
書生の奥秘ハ是なる迄に書て嗜欲なくすくれハ
氣ちから精うあまり神くらきまり多士の二元すなはち
ちからすくれハ是の病是なり おこるかくして後草木の
味をかりてくらけしるを補なんとするハ僅なることい
へり未病をおきまもるものなり

○ 唐太宗皇帝三鏡 以銅為鑑正衣冠
以古為鑑知興廃 以人為鑑明得失

是をもつてあるうちなすあるなる人をもて
人の用をうつすもよひのくけをもつて
右四條藤原松山大言坂清助高松軒の書伊佐世
の唐錦巻の十よりてしる

○ 餐霞館御左右に立御前文
右左右勤仕の暇ナキニ學問ニ志シ朝夕誦讀討論ノ様
子感入タルナニ候学問ト云ハ古聖人ノ道ヲ稽古修行
スルナニ候其古聖人ノ道ト云ハ修身斉家治國平天下
ノ道ニテ候其國天下ヲ治ルハ先一家カ治ラスシテハ
國天下ヘハ及シカタク候故ニ天下ノ本ハ國ニ在リ國ノ本
ハ家ニアリ家ノ本ハ身ニアリト孟子ノ申サレ易ニモ家
ヲ正シテ天下定トコレアリ家ヲ正ノ本ハ君子言物ア

リ行恒アリトコレアリ候然ラハ學問ノ根本ハ此身ヲ脩ルト云カ第一義ニテ候其身ヲ脩ル道ヲ稽古脩行スルカ則學問ニテ候今日聖人ノ道ヲ學ヒ文學ニ携リ候者ヲ學者ト名ケテ別ニ一種ノ技藝者ノ如ク思ヒ私學問ヲスルニモ技藝ヲ學フ樣ニ思ヒ書ニ向ヒ文ヲ書候時ノミ學問ヲスルヿト心得候ハ大ナル心得違ニテ候其上ニ武家武士トテ武ヲ而已嗜ミ聖人ノ道ハ文事ナリトシ武士ハ餘隙ニ學問ヲ致ヿノヨウニ心得候ハ大ナル誤ニテ候聖人ノ道ハ人ノ人タル道ニテ候ヱヘ天地ノ間ニ人ト生レ候モノ聖人ノ道ニ一日片時モ違フヿハ相成ス候武ハ聖人ノ道ニアラヌトハ如何ナル心得違ニテ候ヤラン聖人ノ天下ヲ治ラレ候ハ則文武ノ二ツニテ候但シ武ハ乱ヲ治ルノ道ニテ候ヱヘ事アル時ニ用ル道ニテ治平ノ日用平生ノ上ニ用ル道ニテハコレナク候故ニ兵ハ戯テ時ニ動ク動ケハ威ルトコレアリ候去ナカラ武ハ治平日用ノ道ニアラズ事アル時ニ用ルヿゾトテ打捨置候テハ事アル時用ヲナサス候ヱヘ治ニ乱ヲ忘レスト云テ治平ノ日ニ武ヲ講シ事アル時ニ用ルヿニテ古聖人ノ道岳ヲ農ニ寓シテ一時武ヲ講ルナド コレアリ治平ノ日ニ調練致置ヿニテ候是ハ今日私人武家武士ト心得聖人ノ道餘所ヿノヨウニ思違候誤ヲ申サレトテ此談ニ及タルヿニテ候偖聖人ノ道ハ右ノ通人ノ人タル道ニテ五倫五常ヲ離テ道ト云ハコレナク候若道ハ外ニアリト申サバ

其ハ聖人ノ道ニテコレナク候聖人ノ道ハ則天地ノ道
ナルユヘニ天地ノ間ニアラユル萬物ハ聖人ノ道ニハ
ツレ候ヿハコレナク候況人ハ萬物ノ靈ニテ天地ノ道
ヲ受得テ生レ候ヿユヘ其天地ノ道ニ參リ天地ノ道
モ人ヲ得テ立人ハ天地ノ道ヲ得テ立候ユヘ天地ニ
加テ三才ト云テ人ハ天地ト同一体ナルヿニテ候去ナ
カラ凡人ハ智慮モ淺ク其天地ト同一体ノ道ヲシラ
ズヤウモスレハ私欲ニ覆ハレテ其天地ト同一体ナル
理ニ背クヿ有之候故聖人其天地ノ道ニ從テ道ヲ立
テ候道ト云ハ道路ノコトロニテ大路ニ從行ケバ邪徑
ニモ陷ラズ何方ニテモ行ルヿト云コトロニテ道トハ云ヿ
ニテ其道ヲ以テ導キ候ヲ教トハ云ヿニテ候右ノ通ノ

ヿユヘ人トシテ聖人ノ道ニ違候ヿハ成ラヌヿニテ候故
ニ道ハ須臾モ離ルヘカラズ離ルヘキハ道ニアラズト子思
モ申サレ候夫人ノ世ニ立ヿ孤立スル物ニハコレナク候
父子君臣夫婦兄弟朋友トテ立倫ノカケ候人ハコレナ
ク候其立倫ノ道ハ仁義礼智信ノ立常ニテ立候其仁
義礼智信ヲ能掌得テ父子君臣夫婦兄弟朋友ノ道ヲ
尽シ行ヒ得ルヲ身ノ脩リタルトイフ我身脩リ其ヲ以テ
一家ヲ教ヘ導テ一家能和睦シタルヲ家斉フトイフ其
家ノ斉ヘタルヘヽヲ國ニ推シ及メ一國民安静謐ナルヲ
國治ルトイフ其國ノ靜謐ナルヘヽヲ天下ヘ推及ノ天下治
安ニナリタルヲ天下平ナリトイフヿニテ候其始ハ右仁
義礼智信ヲ能ク行ヒ得タルヨリ始リ候其仁義禮智

信ヲ行ヒウルハ仁ハ如何ナルモノ義ハ如何ナルモノト
知得ルニナクテハ行ヒウヘキヨウハコレナク候ワレヲ得
ルヲ格物致知トヲ格物致知トヲイハ則學問ノ工ニ
テ候斯トイヘハ仁義禮智信ハ一江ニモ足ラヌイノヨウナ
レ氏是ハ仁是ハ義ト慥ニ知得行得ルト中々容易ナ
ルコトニハコレナク一生ノカヲ費シ死テ後止ニテ候斯
ク申セバ大甚知リカタク行ヒカタクトテモ企及ヘキト
ニアラヌヨウナレ氏此仁義禮智信ト云モノ元ト天ヨリ
稟得タル性分ノ内ニアルトニテ他ヨリ求得ヘキニハコレ
ナク學テ得ラレス勉テ得ヒカタキトニハコレナク候唯能
學ヒ唯能勉ルノ二ツニテ候甚能學ト云ハ學ロヨウノタ
カワヌトニテ候能勉ルトハ勉ヨウノ間違ハヌトニテ

候學ヒヨウノタカハヌト云ハ學問ノ目當ニタガハヌト
ニテ候勉ヨウノ違ハヌト云ハ勉ヘキヲ勉ルトニテ候片
日人ノ事物ニ應接スルトハ千差萬別ニテ甚千差萬
別ナル事物ニ應接スル上ニテ道ニ違ハヌ理ニ背カヌ
ヨウニ易シ得ルト云ト胸中ニ許多ノ蘊蓄ナクテハ
甚事物ニ處シ得ルトハ成カタキトニテ候況國天下ノ
上ニ於テヤ古今ノ治乱成敗世故事情ニ通達スルニ
コレナクテハ處シ得ヘキヨウコレナク甚治乱成敗世
故事情ニ通達スルハ博ク古今ノ書籍ニ眼ヲサラシ
博聞強記ニコレナクテハ通達スヘキヨウコレナク候間
學問ハ博識ヲ貴フトニテ候サレトモタヽニ宏覽博物
ニ成テモ身ニ体シ心ニ驗スルノ修行工夫アラサレハ実

用ハ成ノサヌニテ候此心得ノ違ハメヨウニ學フヲ学問ノ
目當違ハストハ云ヘク候序日一語ヲ聞一事ヲ授リ候ハ
夫ヲトクト身ニ體シ心ニ驗シ君ニ事ヘテハ君ニ事ルノ
道ヲ居シ父ニ事ヘテハ父ニ事ルノ道ヲ居シテ勉行
フヲ勉ヘテヲ勉ト云ヘク候子路聞フアリ未ヨク行ハサ
レハ唯聞フアラシフヲ恐ルトコレヤー是ニテ聖門ノ
学問ノ有様知ヘク候顏子克己曾子ノ三省皆ワノイ
ニテ候詩文ノ學モセサレハ古人ノ詩文モトクトハスヽヌ
フニテ学問ノ力モ出サルフニテ詩文ハ則此道義ノ学
問ノ輔ニテ聲ハ食ヲスルニ身命ヲ養ノ筋一ハ五
穀ニテ候サレトモ五穀ノミ食シテハ食モ進ヽス候
エヘ菜肉ヲ用テ穀氣ヲ助ルニテ候其菜肉ヲ稱ヨク
用ヒ候ヘハ穀氣ヲ助ルノミナラス一身ノ養トナルイニ
テ候道義ノ學ハ五穀詩文ノ學ハ菜肉詩文ノ學ニテ
道義ノ學ヲタスケルニテ候況文ハ道ヲ載ルニテ文ニ
アラスシテハ道ヲ求ヘキヨウモコレナク文ヲヨク書コ
ナスニナクテハモカ意ヲ述ヘキヨウモコレナク候
詩ハ情性ヲ吟咏シタルモノユヘ古今ノ人情世態モ
詩ニアラスシテハ通達シカタク風雅ノ情ニ疎ク心
鄙俚ニシ心性ヲ養フヘキフコレナク候能學ヘハ道
義ノ學ヲ助ルノミナラズ修身ノ益モ少カラス候サ
レトモ其心得ナクテタヽニ詩文ノ學ニノミ流レ候ハ
五穀ヲ疏ニシテ菜肉ヲノミ用ヒ身体ノ養ニ成ラヌ
コトヽ脩身ノ益ニナラサルフニテ候學者モ世ニ多ケ

レバ此世得違候テハ眞ノ學者ニハコレナク俗人甚学風
ノミニテ學問モ他ノ技藝トロトシク見ナシ候モ實ニサルナ
ニテ俗人ノ罪ニハコレナク學者ノ罪ニテ候今日学者ノ
上ノ論スルニ文字ノ取ニハシヨク義理ノヨクスミ候ノ
ミヲ學問上達トハ云ヘシキナニテ一年學ヘハ一年学ヒ
候メケニ身ノ行モヲサニリ一家ノ和睦モ各別ニコレア
ルヲコソ学問ノ上達トハ云ヘキナニテ候賢ヲ賢ト
シテ色ニカヘ父母ニ事テヨク其カヲ竭シ君ニ事テ能
其身ヲ致ス朋友ト交リ言テ信アラハイヽタ学ハスト
イヘ共ハ必スコレヲ学ヘリトテ夏ノ申サレシハ
此ナニテ候斯ノ如ク學問シテ古人ノ英邁豪傑ノ資
ヲモテ材能ヲ馳セ功動ヲ立タルヲミテ志高尚ニナリ
恭敬遜讓ノ心ナク大言ヲ吐キ中節ヲハ存スニ屑トセサ
ル類ハノ外ナルナニテ候聖人ノ教ハ庸德コレ行ヒ庸言コ
レ謹ムトコソコレアリ候日用ノ行事ヲ慎行ハスシテ何ソ
大義大事ヲ成行ハルナノコレアルヘキ返ヘシも学問ハ篤
行実践ニコレナクテハ聖人ノ道ヲ學ブ者トハ云カタ
キナニテ候各々日ノ上勤仕ノ暇ナク存分ノヽニ書モ讀
カヲ候ト雖毒ナルヘシ候得トも今日一事ヲ學ヒ得候ハ
其一事ヲトクト會得シ行得カ学問ニテ起居動靜皆学
問ニアラスハコレナク書ヲ讀バカリガ學問ニハナレ
ナン候下ハ上ノ好尚ニ行フナニテ上ノ好尚ハ君ハ臣
ノ好尚モテ知ラルヽナニ候得ハ君ノ學問実践ナラス
浮華ノ学問ニ流候トキハ一國ノ學問モソレニ化シ行

クフニ候今斯之輩日ニ月ニ盛ニ清ク輩出スル此時ニシテ此辭一ト度立テ彼人ノ手ヲフコナヒ後世ニ其害ノ殘候ヿユヘ自己ノ行立サルヲ顧ミス物議顏ニ申聞候ハ恥入候ヘヒ是皆臆說ニモフレナク古人ノ申置レシヿヒ先生方ノ教諭兼置キタル通リニ書記シ候古今倭漢歷代儒者ノ學風モ樣々ニ相見其得失モフレアルヘキナカラ元ヨリ淺見寡聞ノ領リ議スヘキヿニハコレナク候唯日用行事ト學問トニ途ニ成ラサルヨウニ心得タキモノナリ

庚申仲夏

故上杉彈正大弼治憲今致仕シ玆前寺廢寛政十二年夏近侍の臣自書シテ賜シ一篇也老侯の賢明世の知る所

磐水先生隨筆卷之大

○癩蔭樸志

兮撥蛤蟬跕斯曰凡業醫者就諸般疾病必能研精覃思乃預知其本性自然之常道且兼察精神意志之思欲而所為其動靜云為之作用隨跡其方處之治法無所忌憚焉何則本性自然即是善今其順正流通之一大良工也而醫師猶從役服事之臣僕矣

凡治療活法以知人身本性自然為本既自先哲兮撥蛤蟬跕斯之時其醫經中每稱之乃有其譬諭之言曰蓋諸疾病者其人之本性自然乃自愈之醫師者隨順其性為本然自然之臣僕奉承其自然之命而佐使導引之任也

本性自然能快疾病獲故其本性自然良善強實者雖則
有疾皆多善勝之此甚自然之精力相扶故以至自愈若
其本性自然素虛且柔弱者不能勝甚疾病故医師乃為
之治務馳除退散焉然如得甚復故之全非有甚自然之
扶救則雖醫師亦絶無毫功或亦効鮮矣又聽本性自然
不假醫師及方藥之力而大屢有自愈者此多窮巷貧賤
之人所有也此以知本性自然為治疾之要古來哲匠為
標準云

右載于西哲老樓佐恬七斯路児撰而中
日本○　大槻茂質玄澤譯

維皆實政九年丁巳秋八月

解體新書名義

並原本撰者名里略

此書ノ原本ハ遠西ノ「ヨーロッパ」アダム「クルムス」トイフ
人著ス所ナリ其人ノ歸ヲ蕩多悉杭ト云フ其地「ポー
レンド」ニ屬ス（ポロニア　慶邸都蘭土。）明訳波羅泥亜（ポロニア）在于其蕩多悉
杭歸學齋長内科醫師及本然理學博治名匠其帝都ヨ
リ置ク所明理正義大學校都講庠官ナリ其書羅甸ノ
雅稱名「ネブラ」アナトミカ「トイフ其篇分テ二十
八圖説トナス原本其國語ヲ以テ錄ス後未和蘭外科
ノ一名家「ゼラルヒュス」シクテ「トイフ人コレヲ邦語ニ
譯定シテ且註疏ヲ作テコレニ增續シ紀年一千七百三
十四年ニ翻刻シ其書名ヲ「オントレードキュンジゲ・ター

ヘレレトイフ「オレトレード」キュレレ「ケ」ハ解支ノ科ヲ施
シ為シタルナリ「チーヘレレ」ハ毎物圖版ニ見ワセルノ意
ナリ言ヘハ人身形體内外賊毒ノ諸物ヲ支分節解メ一ヽ
図版ニ見シ其説ヲ附シ図ト照シ見テコレヲ曉リ知ラ
シムルヨウニ述タルトイフ義トナル又按ニ「オレ
ドレード」キュレトイフハ解科トイフ一術業ノ名ナ
リシカルヲ詰尾ノ音ヲ「ジゲ」ト轉スレハ動詞トナリ
解科ノ其術ヲ修メ行フヲ云フノ意ナリ又「チーヘルハ」
意義多シトイヘトモコヽニハ圖版ノ義ナリ「チーヘレレ」
ト尾音ヲノベテ動詞トナリヒロクナリ數多クナルニ
故ニ布ニイフ義トナル今此ニ語ヲ約ノ翻スル片ハ
解科圖版ナド名シルノ意乎羅甸「タブラ アナトミカ」

トイフモ固トヨリ其義ナリ今別ニ顯ノ解體新書トイ
フ解體書黨所造詰而即解剖躰體之謂也頗似周禮夏
官羊敵鄭司農註體解節折離驗體解猶未憂等之字意
而與古氏成公八年諸侯誰不解體言不復事之字意稍
相似而義大差矣新書ハ東方ニテ遠西ノ書ヲ始テ新
譯セルノ義ニ取レルナリ
寛政氏午孟冬十九日夜擱筆于茂質述

Zieltens Worden niet gemeten
door Melsgrieken, maar door
Genus mi De Ken

切意

鹿麤工對病　巧言求信
巧言何益　處方甚慎
戊午之夏　繃藤　磐水子譯

De Slaap is De Broeder
van De Dood

譯言

牒助詞斯蠟不睡眠乙斯牒助詞蒲盧牒廣兄弟

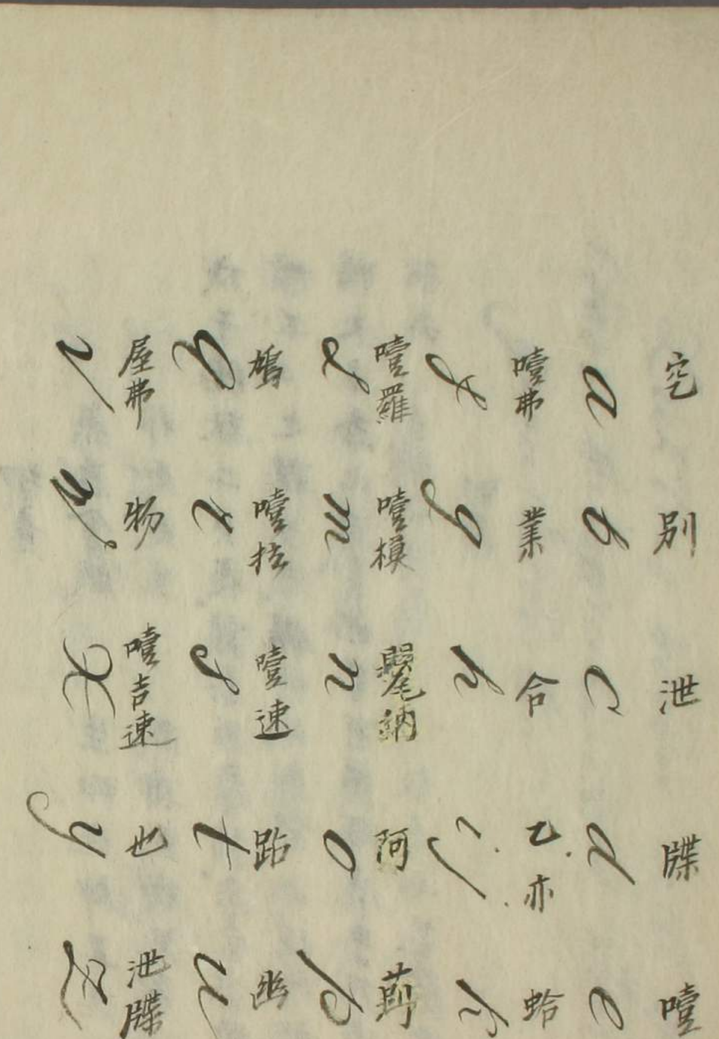
方牒助詞獨倭度死

切意

無為貪眠　生如死神且遠
非死是生　眠與死猶兄弟

戊午晩秋二日夜。讀泰西醫籍。考索首靈釈辞書上際。斯蠟不眠之釋言中。偶得此成詞。此彼所謂象言。而所以古情夫立志之法言也。豈可不服膺手乃漫為譯示家塾生徒云。

芝蘭堂主人識



元生物者。是一機關。而機關均調者壽。差有失者疾。全失者死。夫神統百機。以行于人。目得之而能視。耳得之而能聽。口得之而能言。四肢得之而動作。是故。明曉人身。而後神氣可以御養。神氣得養。而後機關均調。乃可能長生久視也。作人身約說。

人身。其外則皮裹。其表。內填其裏。筋骨支持其間。而軀殼成焉。其內則臟腑位置。脉瀆分泒。而內景定焉。夫而後喘吸天氣。以行化動。服食地粒。以資滋養。而名其有形曰血。若其無形曰氣。氣血兩存。而後心神機關始得以行焉。然氣無迹可捉定。必于血乎。血為飲食之精。夫飲食入口也。得津唾滋潤。其齒牙能咀嚼。而手送之。更為會厭所轉輸。而下咽。從食道（和蘭謂土嚥腸）而抵胃中。胃在橫膜下。位于左盡（加囊而廣濶。主受水穀

加合調和胃之下口在右邊。接十二指腸。其胃中所容之水穀。又下入于十二指腸。十二指腸此指橫經之間也。小腸西洋名薄腸。區分之為三。乃十二指腸化腸廻腸也。膽苦汁。膜內盛苦汁。其汁味純苦色黃。正空鹿弗列乙斯酸汁。空鹿弗列乙斯。旧訳大機里兒在胃下。形如犬舌。小機里兒聚會成形者也。能分利血中酸水聚于此。乃會于從其管兩會二十二指腸者。臨用注十二指腸。汁。相合而注入。十二指腸得此。而其所入之飲食為麝熟之原。運轉漸次至化腸及廻腸。廻腸小腸之終末也。而始消化矣。其所化之精液。名之曰糜乙兒。明人譯乳糜者此也。其糜乙兒者。滲出其腸外。為血液之原。解見子下其渣滓糟粕者。從廻腸送盲腸。盲腸。大腸之本始而位右腹。大腸西洋名厚腸。又区分之為三。乃盲腸紋腸直腸也。盲腸之末端。形如蚓虫。按此腸蠕動以位其運轉。上而進紋腸。又轉下直腸。終從肛門而出也。統

持摩漏二腸者名之曰間腸。旧訳下腦膜其間腸中置漏管。旧訳漏管諸道附着腸膜受其所滲出之糜乙兒輸向腸機力。鹿從吉力作達于糜乙鹿糟糟上接糜乙鹿管傳送其液汁管細薄膜質之一小長管而傍脊椎之左側從屬大動脈。旧訳動脈大幹上達于左鎖骨下洞脈。旧訳血脈之一支別傳送液汁於其支孔會其內所在之血亦其與之化而增盛從此即新陳所合化之兩血大會洞脈幹歸納于心之右室

○靈枢經水篇曰天之高地之廣也非人力之所能度量而至也若夫八尺之士皮肉在此外可度量切循而得之其死可解剖而視之

漢書王莽傳曰翟義黨王孫慶捕得莽使太醫尚方與巧屠共刳剝之（師古曰刳剖也音口胡切）量度五藏（師古曰度音徒各切）以竹筳導其脈知所終始（師古曰筳竹挺也音庭）云可以治病（師古曰以知血脉之原則尽攻療之道也）

文獻通考曰楊介存真圖一卷晁氏曰崇寧間泗川刑賊郡守李庚行遣醫併畫工往親決膜摘膏肓曲折圖之盡得纖悉介校以古書無少異者比改希範五藏圖過之遠

○左傳成公八年信不可知義無所立四方諸侯其誰不解體（左傳正義誰不解體注曰謂事晉之心皆疏慢也句解曰無信無義則四方之諸侯無不解體而離叛者）

後漢書楊彪傳　彪橫殺無辜則海內觀聽誰不解體

通鑑　後漢桓帝延熹二年西北列將得無解體

晉咸康七年天下移心解體（離ヒ叛クヿ和語見限ラルヽトイフカトノヿ）無復南面者矣

史記始皇紀　燕太子丹患秦兵至國恐使荊軻刺秦王秦王覺之體解軻以徇

通雅四十卷　物理小識十二卷（浮山此藏軒愚者大師方以知密之別稱　宓山氏浮山有此藏軒故稱浮山愚者　第三浮山愚者　男中通中履）

物理小識（李文萬曆年間遠西學入詳于質測曆律醫方曰自娛）

人身類（卷十三）

血養筋連之故○主制羣儆曰人身塗熟而已整恒消溼云云腦散動覺之氣厥用在筋第腦距身遠不及引筋以達百肢復得頸脊髓連腦為一因衛及焉腦之皮病肉

視神經
聽神經
嗅神經
味神經

外膚(ヒツシ ヒツシフリース)内柔而外堅。既以保存身气。又以肇始諸筋(ヒーシュー ヒーシュー)筋自腦出者六偶(十二)獨一偶踰頸至胸下。垂胃口之前。餘悉存項内。導气于五官(耳目口鼻形)。或令之動。或令之覺。又從脊髓出筋三十偶。各有細脈旁分。無膚不及。甚與膚接處。稍變似膚。始緣以引气入膚。充滿周身。無弗達矣。筋之體。氣其裏。皮其表。類于腦。以爲腦與周身連結之要紐。即心與肝所發之肝絡。亦首其躰。因以傳本體之情于周身。蓋心腦与肝。三者體有定限。必藉筋脈之勢。乃克與身相維相貫。以彈厥職。不則七尺之軀。彼三者何由營之衛之。使生養動覺。各效靈哉。愚者曰。此論以肝心腦筋(ヒーシュー)立論。是靈素所未發。故存以備引觸

護存心肺

中丞潛夫公講孔炤自号潛夫。夫其隨筆稿曰潛叶萬一曾年間人

肋之骨二十有四。起于脊。上七合十四環。至胸前直接刀(ガヒスト)骨(ベーン)。所以護存心肺也。下五合十較短。不合其前。所以寬脾胃之居也

毒以元气靜正而自解。神以不可知而更壯。醫惜此手。潛叶曰。强弱本乎父母。仁智擴于教學。頤養因乎窮通。色脉關乎憂喜。日度既分。溫冶山川亦別。粗秀氣化之淖。天稟人習皆然。舉所不知則駁。直告其故反疑。人者天地之心。精義入神。利用安身。其最切也。醫貫三才。人子須知易徵節度。此身爲要。

諸骨各有本向。或縱入如釘。或斜迎如鋸。或令箇如匱。或環抱如攢。種々不一。總期體之固。動之順而已。　論肉。其數六百界有奇。其形長短寬狹厚薄圜匾圭角渾畧其勢

各上下相併或順或斜或横或畧此皆各有本用而順本身多異之動是其總向也云々

身内三貴之論○熟以爲生血以爲養氣以爲動覺其相身内心肝脳爲貴而餘待命焉血所由成必頼食化食先歴齒刀次歴胃釜而粗細悉歸大絡矣細者可以升至肝脳成血粗者爲滓于此之際存細分粗者脾包收諸物害身之苦者膽吸藏(メル)未化者腎脾也膽也腎也雖皆成血之器然不如肝獨變結之更生體性之氣故肝貴也心則成内熟嘗生養之氣脳生細微動覺之氣故茲貴也或問三貴之生氣如何曰肝以竅體内收半變之糧凉從本分全変爲血而血之精分更変爲血露(ケーツユ)所謂體性之氣也此氣最細能通百脉啓百竅引血周行遍躰又本血一分由大

絡(脈ノ大幹)入心先入右竅次移左竅漸至細微半變爲露所謂生養之氣也是乞能引細血周身以存原熟又此露一二分而從大絡升入脳中又變而愈細愈精以爲動覺之氣乃合五官四體動覺得其分矣

浮山愚者曰人之智愚係脳之清濁古諺云沐則心徳心徳則以此推之蓋其有故太素脉法亦以清濁定人靈意而貴賤第以骨應之

調火○陳霄春曰哀哉人也火焚而死今以兩木相摩久之得温久之得火七情相摩甚於兩木云々

人身營魄変化○人身小天地四大升降生息無刻有停無論臓腑之傳送停泄嘗風雨露雷相應即皮膜之間一小筋有爲而生飲食所納初化爲膏餳再化爲精液皆藉

真火甕鑑最粗則後阱火必求妃妃乃在水陰實則坎離水火交陰虛則陽燄騰如天地之火非水土塵合以利民生則構釁飈發不可御矣至于秋之靈臺包括縣寓記憶序古安寘此者果在何處質而稽之有生之後資腦髓以藏受也髓清者聰明易記而易忘若印版之摹字髓濁者愚鈍難記亦難忘若堅石之鐫文人身命根矣記任督之脉玄牝之門與天地同天地內外莫藏莫破宰人身者膚骨內外無歉無贏而究竟莫測其何象也謂之眞宰

陽燄倒影○存中曰陽燄照物皆倒算家謂之格術如人搖艣集為土礙故也鳶飛空中影隨鳶移或中間有隙隙所束則影與鳶遂相違鳶東則影西鳶西則影東又如隙筩中樁臺之影中間為隙所束亦皆倒垂與陽燄一也陽燄面窪以一指迫而照之則正漸遠則無所見過此遂倒則無所見處正如隙隙艣艣之勢故牽手則影愈下下手則影愈上此可見陽燄面窪向日照之光皆聚向內離鏡一二寸光聚為一點大如麻菽著物則火發此腰鼓最細處也段成式謂海翻則招影倒謬也陸放翁見福州萬壽塔成都正法塔影倒而未言其理智見牛首塔影寓白門塔影樓而惜人自不察耳

凡寶石面凸則光成一條有數稜則必有一面五色如紙背放光石六面也水晶靡紙三面也燒料三面水晶亦五色映日射飛泉成五色人于回廊間向日噴亦成五色故知虹蜺之彩星月之暈五色之雲皆同此理中通日水能提物入其中物近水影在水面物遠水影在水底故池中樹木人物悉皆倒影空氣接地者屬水故能提物其影亦倒地上有一

物。空中有一影。空中皆氣故也。暗室向明。鑿小圓孔。坦外之物。皆能入。壁上皆倒影。乃攝入虛空氣中之倒影也。光大則奪目。晃洋相掩。故須小光。影始可見。物在東影在西。物在西影在東者。非特影也。人目亦然。左視則物在右。右視則物在左。物皆有左右。而人之東西。視有左右。而知交處之物。離地遠也。

聲論○目以水照。故物攝其中而見。耳有三門。故氣貫而雷之乃聞。目與鼻口皆當面直受之者也。耳乃旁貫中通者也。氣自有聲。空自生聲。惟耳攝而通之。惟心靜而知之。天以雷風為聲。地以竅穴為聲。皆陰陽氣相摩盪而不已者也。而人可知矣。暗曰。氣本有聲。故物擊物。氣擊氣。物擊有聲。特微耳。聲之始也。肺氣擊物。皆成聲。不相擊而氣自飛。亦氣于管。管出於孔。鏡之爆傳呼。皆井之遥語也。天鼓星裂。雀鳴戶響。地下無作也。氣擊氣也。鐘之搖。絃之馳。杖揮空。蟬振翼。蛟聚蟄。飛燒蟬切股。箭跨。哨聽。石崖浪蹴。松下濤生。砌檐吹鳥。委巷麻鑼。無之而非聲。則無之而非與物相擊。亦無之而非氣也。入于地。穴藏于篋中。倚于磬側。靜而聽之。皆有所聞。即萬籟俱有聞。亦若有聞。蓋氣以自飛。不定而復相遇也。中德曰。氣貫聲作。心亦有聲。默誦暗記。心亦有字。乃知想從心相。意從心音。中通曰。氣之成聲有二端。一相擊而成。于宣言之詳矣。一穿竅而成。炙穿竅而成。不能成聲者。更有二端。或止獨竅。氣不能出入。或兩竅相。不能究。尚竅盡氣。氣不能留。凡此則氣不回。環于其間。皆不成聲。故耳鼻之不加。喉者。喉因上有鼻孔。內有氣管。故耳使氣管有出氣之處。而不專。簫管有損。則不響。手耳之聞。聲者聲入于左。必穿于右。聲入于右。必穿左。故左耳受聲。則聽在右。右耳受聲。則聽在左。近不能聽。遠則覺也。序之沿耳。因者。右耳因則以葱貫左耳。左耳因則以葱貫右耳。理必交互。可徵也。

聲異○遯齋閒覽言歐公過高唐驛聞空中人畜聲。父老云二十年曾晝過。此謂之海市。酉陽雜俎言掘井聞下車馬人物喧哄聲。又公叙茅茹福清紫微侯。夜聞誰呼聲。皆是浙音。人謂之鬼市。曹能始名勝志云。蜀中江縣寧國寺有響壁。若人處者拍手而應。則絲竹管絃聲。達于外。太姥

有空谷傳聲處每呼一名凡七聲和之老父以問壇石熊公公曰峽石七曲也人在雲洞其聲即有餘響若作夾牆連開小牖則一聲亦有數聲之應層樓檻內門窗紙上大小破隙則風來作絲竹之音若高山日暮聞城市之喧聲以日氣斂而人靜聽也昌嘗江上晡出三山峽角聞魯港鳩鳩之人聲風順夜靜則山頭聞百里不為奇矣噎曰荒谷傳聲（箋裏藏聲兩者一理也凡地遠者聲下則聽上中隔則聲在而聽右風順則聲直而聽遠坐中有聲所謂傳也大酉有益耳遠聽法與遠鏡同功）中德曰狗夜聽最遠以得地氣也逐虎者以盡數覆地雷之其聲入地穴而愈震也（中通曰地中有穴地上之聲悉藏之成南塘以大箋覆人聽響地道或以竹筒貫地穴而耳之）隔聲○秘鑄者匿于湖中人猶聞其鋸銼之聲乃以甕為甃累而牆之其口向內則外過者不聞其聲何也聲為甕所收也（暄曰廣孝帝用此法造器械又燒生尾枕就地枕之可聞數十里外車馬聲）

空中取火法○爾雅艾冰臺郭注邢疏未嘗言取火之事陸農師乃引博物志云削冰令圓舉而向日以艾承其影則得火故名冰臺蔽座師楊用賓曰凹者凡交在前凸者凡交在後脣則琉璃有火齊之名亦以其凡取火也若以燒料作火圜珠以紙艾等承其後即可得火西齊里亞有巧師名錢墨得曾鑄巨鏡以燧取而燃艘中通曰火本無形籍物發凡或兩物相擊而出或兩凡相照而生無處非火但不見耳如鐵擊石竹擊木舟擊水皆有火出物孟明者母論水晶琉璃號珀陽燧冰臺凡物圓形皆能取火日射物中物中凡有一日日本圓體曷圓物則凡聚內外相照凡必相交凹凸交于前凸交于後故于交際得火也

海市山市○泰山之市因霧而成或月一見嘗于霧中見城闕旌旗絃吹之聲最為奇海市或以為蜃气非也張瑤星曰登州鎮城署後大平樓其下即海也樓前對鼓島海

市之起。必由于此。每春秋之際。天色微陰則見。頃刻變幻。鹿徵親見之。島下先湧白气狀如奔潮。河亭水榭。應目而見。可百餘間。文窗雕闌。無相類者。又一次則中島化為蓮座。左島主笋縣幡。右島化為平臺。稍為三島連為城堞。而幡為帝幟。雎陽袁可立為撫軍。時飲樓上。忽艨艟數十揚幡來。各立介士。甲光曜目。朱旆蔽天。相顧錯愕。急罷酒。料理城守。而船將抵岸。忽然不見。乃知是海市。遯齋閒覽曰。湘潭方廣寺。四月朔。日在東壁。則照見維揚官府樓堞民舍影著壁上。張邦基言。在四明船局時。王璟祥昭往昌國普陀山禱雨。言洞甚深。但聞水聲。上復有洞穴日光所射可見數十步。菩薩現像于此中。余密禱之。見碧玉闌楯。又現紋如珊瑚。于深處見菩薩像下身。僧言番賈來施而禱

或見淨瓶。或見瓔珞。或見橋梁。或無所覩。祥昭平生倔強至甚。頗信宓山笑曰。又弱一箇焉。林景熙蜃說曰。漢志載海旁蜃氣象樓臺。初未信也。避敵海濱。值報海中。忽湧數山。予登聚遠樓。見奇峰疊巘。城郭臺榭。中有浮圖。先子官。詭異千狀。近晡而滅。筆談所紀。往往類此。噫。秦之阿房。楚之章華。魏之銅雀。陳之臨春。結綺。突兀凌雲者。何限。運去代遷。蕩為焦土。浮埃。是亦蜃也。暗曰。气映而物見。霧气白湧。即水氣上升也。水能照物。故蜃气清明上升者。亦能照物。气變幻。則所照之形。亦變幻。暗邑近南關內。有一小池。一日盆晡。見有一騎。倒影西岸。水中北馳而過。此所謂空中一大鏡。水滴窗隙。則轉映之小鏡也。地上人物。空中無時不有。特气聚則顯耳。故下論山海都地。悉得見之。中通曰。空氣之攝影。自下而上。池水之攝影。自上而下。故影皆倒。山海之气橫攝市影。故影皆順。暗曰。倒影者轉攝則順。

萬治二年己亥七月廿三日生於江戸享保十八年癸酉九月十八日死京正親街壽七十有五葬於千本蓮臺寺中普門院

養菴先生後藤君墓誌銘

香川修德　謹譔

子省　謹譔

子省　謹述

先府君養菴先生行狀

附錄　養菴先生遺教

凡欲知醫者、先察庖犧起於羲皇、菜穀出於神農、取法於靈素八十一難之正訣、捨其空論雜說、文義之難通者、涉獵漢唐張機、葛洪、巢元方孫思邈、王燾等之書、不惑宋明諸家陰陽旺相、府藏分配、區〻之辨、識百病生於一氣留滯、則思過半矣

夫人稟性於天地、而囿形於一氣者乎、橫目二足、雖則皆同、而風土氣習、自然不一、是故膏粱藜莧、腸胃霄壤、蕉葛羅紈、肌膚玉石、其居養不齊者、亦自然之勢也、然外感內傷、皆在一氣、一氣者、元氣也、元氣果何物哉、即滿腔子不寒不熱、不濕不燥、自得溫〻活動之勢者、是也、所謂溫〻活動之氣、非茱石可以續者焉、非符咒可以延者焉、古序人身、常久一轍、使其順接充長健運之者、則全在乎穀肉火化之氣味矣、半日不食則氣衰、一日不食則氣大、終憊而死、可以徵焉、何者、序時廣德之人、幾乎未之有聞也、不節穀肉、不愼起居、陰虐暗籌、溢面過度、是以一元氣總水留滯也、上下左右、表裏前後、彼爲有餘、此爲不足、而其見證亦有淺深久近、輕重緩急之不同耳、凡病大者必死、雖不死者、痃癖瘀血、隨生隨釀、動爲終身之痼疾、困苦時發、或剩或缺、遂成不完之身者、間亦有之、於是乎、內外診法、皆當詳審精到焉、然則日常之養、萬病之治、亦不失臨應之舉用矣、予屬

者搜弊筐敗篋中、幸得字紙一葉、即所謂原文是也、
哀感收泪、展其綴痕、以拜讀流涕之、則先君子、晩年一
隅之教、深切簡易、字僅九十有四、本是享保辛亥十月
五日、門人山本椿、將還東武時、先君子自書斯語、以充
贐儀也、不意其篤手澤、猶新、遂成遺留物矣、嗚呼先君
子、夙志聖學、不事文字、屹然獨立、百撼不搖、平居未嘗
少自暇逸、垂訓迪後、俾乎勇哉、予也不肖、徒知讀父書、
稍得窺醫術之一斑、焉謹以原文目曰遺教、恐然向之一
葉墨蹟、經年、蟫蠹漸盡、永辭人間、因是命椿貼匠、姑為
横披一幅、高掛齋壁、共稱其實、欲使子弟就此求正、以
加日新之功焉耳、斯蓋予惓惓之深望也、

○海國聞見錄上下　同安　資齊陳老先生ノ父其所著ノ輯錄ス　名倫烱　雍正八年庚戌
序乾隆九年甲子　八年及九年三人ノ序アリ

東洋記

天地之大何物不容輕清之氣包涵萬類星辰日月亦有
所不及而聖人測理備至定四方製指南分二十四籌由
近之遠莫出範圍啓後世愚蒙識萬國九州矣而九州之
外又有九州謹按四方外國地方海道人物風土粗據所
見聞而畧誌之俾後之君子有所採擇朝鮮居天地之艮
方聯盛京對天津古箕子地分郡縣臨員里道朝貢經由
歷代史典專地図備紀無容勦說其南隔一洋日本國屬
土對馬島順風一夜可抵明閑白為亂者是也自對馬島

而南寅申卯東方一帶七十二島皆日本倭奴之地而與
中國通貿易者惟長崎一島長崎產之粟菽難供食指開
貿易入公家通計終歲所獲利就長崎挨戶均分國王
居長崎之東北陸程近一月地名彌耶凞譯曰京受封漢
朝王服中國衣裳國習中華文字讀以倭音予奪之權軍
國政事柄於上將軍王不予預僅食俸米受山海貢獻上
將軍有時朝見而已易代爭奪不爭王而爭上將軍倭人
記載自開國以來世守為王昔時上將軍曾篡奪之山海
應貢之物不產五穀不登隋陽不順退居臣位然後順若
如故至今無敢妄奪者官皆世官世祿遵漢制以刺史千
石為名祿厚退以養廉故少犯法即如年僉舉一街官街
官者猶保也歲給贍養五十金事簡而間通文墨者者高
士優以禮免以徭俗尚淨潔街衢時為拭除夫妻不共湯
羹飲餘婢僕尚棄之富者履坐絮蓆貧者履坐蔗名曰毯
踏棉各家計攤毯踏棉之多寡為戶口男女衣服大領濶
袖女加長以曳地盡染花卉文采禪用帛幅裹綫足著短
襪以曳履男束帶以插刀髡髮而薙頂額留髮至後挽濶
寸餘向後一挽而繫結髮長者修之女不施脂而傅粉不
帶鮮花剪綵簪珥而插玳瑁絲髮如雲日加滌洗薰灼楠
沉髻挽前後爪甲無痕惟怨紐垢至於男女眉目肌理不
敢比勝中華亦非諸番所能比擬實東方精華之氣所萃
人皆覆姓其單姓者為福配合之童男女也為福所居之
地名曰為家村其塚在熊指山下其國男子年五十餘陽
多癡妖者儂也故呼之曰倭奴俗尊佛尚中國僧敬祖先

時掃墳廬得香花佳果非敬佛僧則上祖墳人輕生有犯法者事覺向荒山割肚自殺無累他人立法最嚴人無鬬訟言寂寂呼童僕鳴掌則然諾無售買人口傭工朝滿即歸所繞屬國二北對馬島時朝鮮為界朝鮮貢於對馬而對馬貢於日本南薩峒馬時琉球為界琉球貢於薩峒馬而薩峒馬貢於日本二島之王但聽指揮氣候與山東江浙齊長崎與普陀東西對峙水程四十更復門至長崎一十二更北風從五島門進南風從天堂門進對馬島坐向登州薩峒馬坐向溫台地產金銀銅漆器磁器紙笑花丹漆印海產龍涎香鯨魚海參佳蔬等類薩峒馬山高峻巖溪深水寒故刀最利兼又產馬人性健嘉靖間倭寇者薩峒馬是也日本原市舶乘嘉因倭之漁者十八人被風入中國奸人引之為亂髡鬚雜額雜以遠處土語迭相攘掠郡稱倭奴後平田國僅十八人王正以法隨禁市舶中國聽我彼往至今無來者倭載十八奇士普陀往長崎雖東西王向直取浚橫洋風浪巨險謹云日本好貨五島難過厦門往長崎乘南風見臺灣雞籠山北至呂宋暹羅香蕈洋再見薩峒馬大山天堂方合正針暹蕈二洋者洋中水面若糠粃水泡若蕈菌呼之為呂宋暹羅香蕈洋薩峒馬而南為琉球也居於乙方計水程六十八更中山國是也習中國字人稍而國貧產銅器紙螺甸紙瑁無可交易甚衣冠人物貢由福州久熟習見故不詳載自日本琉球而東水皆東流莊子所謂尾閭之不知何時已而不虛也

天下治海形勢錄

廣省尤打虎門市扼香山而香山雖外護順德新會実為
省會之要地不俱外海捕盜内河緝賊港汊四通奸匪殊
甚且若夷澳門外防番船與虎門為犄角有必者豈可泛
視哉

大西洋記

西洋人誌四方洋名以東南欧處之海洋為東洋　戈什
喏為小西洋日本為大東洋紅毛為大西洋

○

條名類聚欽　源順奉延長第四公主桑德之命　撰
二十卷　四十部　二百六十八門
往世位上能登寺源朝臣順　村上帝天暦頃の人なり

○漢文利亞刻産科眉

ANATOMICAL TABLES

XXXIX.

四十一

by William Smellie, M.D.
London:
Printed in the year MDCCLIV.

非蒲涅兒

○

MACROCOSMUS Woord geniaant het geheele
Wereld-rong, nameentlijk den aarde in
tegenstelling van Deezen Woord De mensch
MICROSMUS, Dat is De kleine Wereld, genaam

Vele hoeden daar voor, dat tusschen beiden
een zonderling verwandschap zij.

○ 三天地 MICROCOSMUS. De kleine Wereld. Dit is een
benaming, die den mensch, als een kort
begrip der gantsche Wereld gegeven word.

位置 ○ MACROCOSMUS, De groote Waareld, of het
geheele gebouw (作) van deze Wereld, hier door
word alles verstaan (ルヲ解領聽知ヨ之ツ) dat er in de Wereld
is, en dat dezelve uitmaakt (与出同), behalven den
mensch: want deze word met de Wereld
vergeleken, en
MICROSMUS, of de kleine Waareld genaemt,

hierom stellen zommige dat tusschen dezelve
en den mensch eene bijzonder overeenstemming (形同 様同)
is.

○ MICROCOSMUS. betekent eigentlijk de kleine
Wereld; in de geneeskunde word hier door de
mensch verstaan.

○ 非勒涅尔曰麻可潛可路模斯、炮界全球、名即天、
地ト、間隙ヲイフナリ此隙ニヨラ位スル人来ル米可潛可
路模斯トイフコトハ過域ノ義ナリ蓋此名アルモノ、體
中尼ノ事體ニ合著スルヲ以テナリ即チ天地間ニ在テ
ソレト俱ニ一種ノ同類ヲナスモノナリ

兩○藏刺者傳無論
雷電霹靂也与傳造風
烟霞

又曰茶可魯可踏模斯ハ小區域ノ義ニシテ乃人民ノ一ナリ
此レ人ハ天地全象ノ體ヲ自ラ此身ニ短縮ノ含包スルヲ以テ
ナリ
伍乙志曰羅甸麻可魯可斯模私ハ大地世界ノ一ナリ乃此
廣大ニ造立セル総界ヲライフナリ其世界ノ理ハ如何ニイ
フヲ盡ク領解スルノ靈慧アリテ其世界ト共ニ同ク
生スルモノハ人ナリ故ニ此世界ト總テ其體ヲ為スノ理
ヲ同スコトヲ以テ人モ亦「茶可魯可斯模私ト名ク即小世
界ノ義ナリ蓋人ハ此世界ノ間ニ居テ彼ト一種ノ體ヲ同
シ且其理ヲ備フルヲ以テノ故ナリ
又曰茶可魯可斯模私ハ小世界トイフ義ナリ驩家此
名ヲ人ニ配シ其攝生治術ノ義ヲ理會セシム庚申仲秋十六日譯

○レーフト ウエイス オムニ ウエル テ ステルヘン ヅート
ウエル エシ フレーストニーニシト ニーニシト ンシデ
ヘイアント
務生而慎其常安分而善甚死則天下亦誰敢敵秋且
誰有敵之者
メン ムート エーテシ オムテ レーヘシ ノ ニール ニート
レーヘシ オムテ エーテシ
夫人待餌食而生非但欲生而餌食
イキ ヘツベ メキシ カランテン エット ウエルノ
ゲステルト オム エル ユ、ン エインデ ハンテ ニーケン
吾殫精力而研究其業欲樹微勲於後昆也

○白石藩輪譜　始慶長五年至延宝八年凡八十年間始
封襲爵及復除等都三百三十七家正編十卷附録二
卷凡例目録共一卷為三冊全部分為四冊
白石　明暦三年丁酉正月大火の後内藤右近大夫政
親の柳原屋敷の假屋へ二月十日在刻生る時時
父五十七歳母四十貳歳なる洞ゝし時のゝ也父なる
人丈君土屋豫州へ連れ納れ用をすゝしに脈出たり
君美の廿一歳なして彼家に去る寄年延寶五年二
月廿七日なり
三十歳の頃床下頃庵の門人となる
廿三歳の時稼沖の家滅ひ仕への道閉け城田西
後松平氏に六歳の三年仕官す一年と隔て廿八歳のとき

上の事ゝ聞き記せし世五歳の秋此度仕へを請
ふ所を許さる三十七歳十一月十六日藩邸家宣公へ
召出さる同十八日侍員見　甲申十二月公儒副な
立ち給ひ西城へ入せらるゝ
没年六十九歳浅草報恩寺に葬る
寶永六年己丑七月九日遷馬人は達喜来由に因る亀
き由仰蒙る別記ゝ　西洋紀聞の
正徳二年壬辰春　白序を受て二月廿五日より三月
九日に至る康貞の阿蘭陀人に問答す別に録せし
ものゝ　和蘭紀事　阿蘭陀考　西學考略
西學考略問答

大潮　肥前蓮池黄檗宗龍津寺現住

華音ノ師ハ長崎ノ佛生國手靖ナリ國手ノ師ハ清人
杭州松眉山ナリ大潮老手ノ後佐賀ニ隱居ス　大潮
華音ノ弟子佐賀長淵寺古痴

平聲　平而長　上聲　厲而上　去聲　下而去
入聲　入

其物ノ音其字音トナスモノアリ其字ニ其音アルモノアリ
虎　フウ　猫　ミヤウ　舌　ゼ　齒　スー　嘔　エウ
和訓ノ華音ヨリ出ルモノ
梅　ムイ　うめ　馬　マ　うま　菠薐　ハリヨンカハ　ほうれんそう
豆加　ウカ　うこぎ
秤　ヒヤウ　竈　ツヤウ　硬　ケエン　件　グエン

○潛龍魚　テウサメ　廣東新語
○犀尾　堀本好益藏　京都百ゝ後道モ藏ストイフ
○雜纂　全譯解　文章一貫
○人精　時珍曰營氣之粹化而爲精　ヲヱ　謂精爲鮫者精
非血不化也謂精爲寶者精非氣不養也故血盛則精
長氣聚則精盈
鮑景鈿云神爲氣主神動則氣隨爲水母氣聚則水生
故人之一身貪心動則精生哀心動則津生哀心動則淚生愧心動則
汗生慾心動則精生
水漉　ミヒ　石　湧泉小品　海井　レツキステーン
高山源黑魚　物理ヲ識　箱根山中ノサエ　セウウラ　トカケニ似タリ　鯢魚　サエセウウラ

○三音正論　上下二卷　無相沙門文雄僧鬱撰

音韻總論

天籟號衆竅和之人之有生也情発為聲成文為音音
未謂之韻而后結繩以代之鳥蹟以當之徠而翻切聯韻
學成自発而出矣世界萬國蒼生之所居何不如此也
方方之世杭州漳州官話各異歷朝多品可思
而知也其譯四方夷言者亦各依其土音不可不知也我
邦舊傳音有吳漢唐宋其如四聲七音也雖遵支那而存
之異傳習已久諸併亦不廢

吳音

本邦傳吳音也由來尚矣立其說辯其權輿者稗說已糾
紛予嘗御曰吳音也者本邦讀眉之舊音也序佛氏所用
是也日本紀應神帝十六年百濟王仁來于我論讀書於
皇子菟道雅郎子云其音蓋吳音也以故國史所傳惟此
一音而已先代舊事本紀顯額及上宮聖德之名其他所
載神歌字先以吳音云云夫吳音者原支那江左之音云云
予或曰日本近吳國故須吳音按此說是也吳明南京也
云云百濟亦郵手吳所以王仁用吳音也云云

漢音

漢音者序之儒家所傳音是也其始草創于桓武朝日本
後紀云延曆十一年十一月辛丑敕明經之徒不可習吳
音発聲誦讀既致訛謬熟習漢音延曆十七年格太政官
宣曰諸讀書出身等宜讀漢音勿用吳音或曰延曆十七
年詔用漢音讀五經明經之徒從之讀十三經也如詩文

雜書呉漢雜用佛書仍舊以呉音讀写按延暦間遣唐使
往来頻〻而漢音傳於彼東當時四声守而不紊與今遥
庭雖然非唐朱正音也正音自有唐音在今之漢音者就
唐朱莫經見其名計邊地方音亦同呉音唐朝廷雜行之
音也

華音

華音者俗所謂唐音也其音多品今長崎唐人家所學有
官話杭州福州漳州不同 [illegible] 右上巻

○一先達ノ甲斐徳本十九方ヘ出ル人光國氏ヘ用達シ
其ノ答ヘ云ハ而拙ノ業ハ拙者ニ
拙ニヤ又ハ内密ニ伝授ス正席ヤ上巻

鬼縛 風邪カヅラ是ハ勝有ル
甲有ル毒ニシテ
狐酒 鶴蘭霜

白華 輕粉
蘭酒 巴豆

○蜿蜒明度 騎猩性行 遼天都峯記 休寧 呉啓元 青霞

ヤニュ ヘブリュ ニール アプリル メイ・エライ ユレイ
アウ・セプ オク・ノー・デーセム ニール アプ
メイエ ユーレ アウグ セプ オクト ノーヘム デセムベル也
算盤 宋謝 秦微算經

燕脂ハベニノ一ナリ我邦俗間生燕脂トイフモノハ漢名紫
鉀棉ナリ紫鉀ハ麒麟竭ノ生スル樹ニ出ル異巣ノ結

成スルモノヲイフ（紫鉢コレヲ花浸紫トイフ）此物ノ棉ニ浸シタルモノヲ紫鉢棉トイヽ秋方ニハセウヒンジトイフナリキリシケツハ其樹ノ中心ヨリ出ル脂液ナリ既ニ通雅ニハ此木ヲ直ニ紫鉢樹ト名ク和蘭ニハ「ダラーカボーム」ト名ク

知音為妄即妄是真認妄為真難。真亦妄

陳眉公曰古人以蘭為香祖余欲結茅四面樵蒔蘭蕙扁曰香祖菴有杜聯云　異人常在漁樵裏　老鶴多眠蘭蕙中

右見讀書樂趣

○助援　佐助

排出悪疵汁悉為膿而出也故瘡瘍可喜之者也内傷病之患獨除ス

○琱玉集　二巻　尾州熱田蔵　経文ノ裏書天平写本

○文館詞林　三巻残缺　紀州　寺蔵　林奈主取出シ

○書經會選　劉三吾　六巻　十二冊

月見の園童月　伴蒿溪

而のら友のら庁青拓る月の遊ひハ楽の

忘れず

紫旦

未の書付杯のとかをの明けのとは遠山ぞらた　芦庵

一聲の雲

De Vriendschap van een Heer is
Zelden De Zelfde die 's Morgens
Goed is en 's Avonds niet meer Deugt

小人の交を棄ること朝に棄て夕に
苦し

Snee het Ijzer terwijl het Heet
is

鉄を温める間に鍛刀せよ事初めすなわち時し

Chen moet Zijn Arbeid trachten te leeren,
Zolang men Vogel Het Vliegen.

人の家職を身の業に等し学ぶ為に庵ること

傳子口錄　測鑑類函巻一百五十九　口五

神以感通、心由口宣、情莫多言、口莫多言、病從口入、禍從
口出、存亡之機、開闔之術

病榻口ヨリ出入スルノ教誨、郷土ノ清菴先生毎ニ書
ノ子弟ニ示メ既ニ茂質カ先生ノ肖像ヲ図セシメタル
一幅ノ上ニモ此教誨ヲ題メ口誡ヲ示シタ、フ余少年
ノ時嘗出遊ニ問ワサルヿヲ憾ミトス片刻ト三十年

二及ビ享和壬戌正月十八日見出スヿヲ得テ喜テコヽニ
抄ス

以無暇曰不學者雖有暇亦不學
慎厥初惟厥終終以不困書經
下流不可處君子慎厥初應場詩
聖王重始正本敬初古人之所慎也晉書景帝紀
君子以作事謀始易
惟周公克慎厥始書經
恐懼爲則思慎始以敬終舊唐書魏徵傳
人君者譬木詳始敬小慎微春秋繁露
君貴建本而重立始說苑

不爲福先不爲禍始莊子 不爲福始不爲禍先南史夏詳傳
立春之日下賞大書曰方春東作敬始慎微後漢禮儀志
尊嚴祖考所以崇孝奉行也追本敬始所以篤教流化也
魏志劉馥傳 別物居方慎初敬始阮籍通易論
君子敬始慎爾所主 王粲傳
可謂知始知卒希世之賢也 北史尉元傳
民懷其始未保其終舊唐書張蘊古傳
川廣自源成人在始 張華勵志詩
楊阜曰克己內顧聖人所記惟陛下慮萬無形之外慎萌
纖微之初 魏志

○儀狀嚴整 風貌端美 神觀邁爽

○ 狀望常に非常人也　神彩儀容　姿貌秀偉
容貌甚嚴　則一雄毅嚴重　環傑志氣宏　絶異矜嚴
有威　則偉　威重　姿貌秀偉　姿儀　面皇雄異
環一奇偉　秀傑

○ 伴蒿溪閑田耕筆
世ていうけ出者といへハ齢はあたらぬ事なれ共
人ハ嚴重に慎ひ一面ハ事なりうけハ七ツめ出けハ五ツ
あるく性なるハ不知知ず筆ハ有るに
みるを指却者却と書なれらひ云ハ先の面目のごく
得ると指暇者暇と書魚　大般若経に貧窮者服入有
暇といハ是也　貧窮服　佐ま貧乏暇なりといハ是也

右ハ禪者の話なり

○ 月花の如くに見せく思ふ人ハ二もなく
春秋もなし
いつれをも月を見ぬ色もの色なりなれ共
乃指同所のけ
門内ハ孟宗所ゆうくしめる
人間ハ多くの中をハ秋門とまた春門の藪
なりと

○ 秋霖燒屋轉凄涼紫湿廚間無火光向晚兒饑啼不絶滿

○身羣沸騰時瘡

○宗旨

三論宗（人王三十代 慧灌僧正）　修驗宗（三十五代役公氏小角）　法相宗

俱舍宗（南都一二ヶ寺アリ）　成實宗（他宗ヨリ兼帶）　律宗

華嚴宗（慧藏法師 大和）　法華宗（異名天台宗 教大師最澄）　傳　眞言宗（弘法）

大師空海　臨濟宗（黃蘗泓 千光國師）　淨土宗（法然上人）　曹洞宗（道元）

禪師　一向宗（親鸞上人）　日蓮宗（俗ニ法華宗トイフハ誤リナリ 号稱題目宗）

時宗（又一遍宗トモイフ 一遍上人）　普化宗（禪 虛伏居士）

八宗兼學 三法、俱舍、成律、華法、眞

○日藏傳曰入法性眞如土山降伏無明煩惱土敵故名

山伏

○元寶艸 本草從新 生江浙田塍間一莖直上葉對節生如

元寶向上或三四層或五六層 蘭山曰ヒトケノザ

八角金盤 仝 植高二三尺葉如臭梧桐而八角秋開白花

細簇取近根皮用

煙仝 辛溫治風痺濕痺滯氣停痰山嵐瘴霧甚氣入口

不循常度頃刻而周一身居人通體俱快以代酒代茗

終身不厭故一名 煙筒中水 煙火氣薰灼耗血損年人自不覺爾

想思艸 閩產者佳 能解蛇毒

人茶湯

粳米 炒三次 人參 五分

胸中黏痰

桔梗　杏仁　丹皮　煉蜜

吃逆

丁子油二三滴投白湯用　又方　龍脳　焔硝

治蛇咬

煙脂タバコノヤニ

○

所歩新　苗字帯刀　袴着用寺院等へ袖搦捨羽織

歩行シテ所用シ新キ文新ナル方ノ名ヲ

所作主　麻ニ諸地所（由緒アル土地ヲ重ヘ繰ヲ重ヘ

いつるもの　花ハ元ノ花ヲ上ガリ本ヲ沒目ニ少ク勤敬ヲ

地所（出生地所　家ノ子ヲ　繰ヘ繰ヘ重ル事ヲ繰返

二人　岩谷堂ノ人ノ名ヲ

所名　所金拾上納ニ百姓惣代ニ住居

シ家ヲ建ル事　上ニ所名肩ヲ乗シテ居ル事

○

人生五十　酒の古名　区志の考　宇治五十槻著

菊ト云ハ稲ヲ菊ト奇シキ名ヲ付ル所ヲ

ヨトハ云ハ少ナルシ　ヒヒ　星ヲ上古ヒヒ酒ノ称

ニ形ヲ造ル　大汝少彦名二柱神ノこの酒ノ造リ神

ヨリ薬神ト中ニ成ル薬ノ神ヲ療

病方ノ定ル　舊辭ヨリ　星霜

稚饌玉ヲ酒饌手向　久志酒ノ醸セル器ノ

出雲ノ國造ノ神寿詞　大元持所ノ

区志考　大彦命ノ子孫門部ヲ

○痘疹要方 乾坤

痘疹治術傳

明戴曼公 著

日本 門人周防 生田 池田 正直 校正

玄孫 池田正直著

痘疹啓舌秘訣

治痘用方 寛政四年壬子

池田瑞僊 欣美識

伊賀 雲林院克誠謹序

○橙 清商ハ柚ノ小ナル橙トイフ ダイダイ 田青橙ナリ

香橙 一名蜜橙 ノ子ノボ 臭橙 カブスロ月ノカザリモノ皆臭橙ヒ多ノ肥後ヨリ出スカイブシニスルユヘカブストイフ

坐繁州 和名未詳 舶来ナリ

○醫學、操外身生死之權、蓋人世所重、莫甚乎祛甚所忌、所忌莫甚乎害命之疾病、之名無筭也、而療病之神藥正方又無筭、故有垂死而得一神藥以復甦、有輕疾而投一神藥以復甦、有輕疾而投一妄劑以致殞、古諺云賊心莫甚乎邪俗、賊身莫甚乎邪藥、又云、病之厲者、什死一二、醫之愚者、什死七八、西國不敢輕易此舉、必立國中講醫之庠、延博學高明之醫、已曾留心斐錄者、始后習醫之徒、相從、肄學詮釋古醫之遺經、発明人性之本原、辨外体百肢之殊、内臓諸情之驗、及万病之所以發、而因設其所用療

治之藥、大約六年之內、博習醫經、然後隨師、日觀所診之脈所定之所試之効、而始合其得與考選也、考非精熟領主司之命者、不得擅醫人

右文儒畧西學元

○慶長十年乙巳初南蠻傳菸種民喜樹之煙管製造徧天下 大君憎其亡益也不合禁之

十五年庚戌民間藝菸艸者復浸多縣官禁而弗已卒廣台良田於是再下令嚴其禁 逸史第十

○蠻人耶楊子上變云〻眞耶楊子郭內享給絃身」慶長十六年辛亥十月

○德山鈴木玄冲隨筆曰或曰和氏丹氏上池院壽命院竹田法印是号五典藥頭也 本朝典藥頭中華大醫令準之乃醫門之官階爲之極也近世醫師薙髮倣僧形蓋自足利氏之中葉始云丹水子曰或問醫爲僧形何也曰無官位者不可近於貴故與僧召之或曰古有黷行私人妻妾者如陽侯殺夔侯而竊其夫人故大饗廢夫人之禮者也按一冊子曰和氣氏絶後其術傳於傳教禪師叡山設藥師堂且祭山王二十一社蓋表人身脊骨二十一節也當時學醫者皆入叡山圜顱叙法位而還以爲常云

陸氏

醫家之書近於仁醫家之事近於利

或曰

寧為君子醫不賣勿為小人醫要譬

古（管叔ハ周ニ対シ逆心ヲ懐キ暴戻ハ孔子ヲ知らざる狂徒を
千百年ノ後ニ残シ和文勉叔ハ管仲ヲ薦メ子産ハ子
産ヲ薦メハ孔子ハ是ハ賢ヲ薦メ賢ヲ薦メ
挙ハ者和漢ノ法（のくいきし）伊達ノ殿ハ一ニハ伊達ノ先祖伝綱
板倉ヲ酒井讃岐ノ殿ヲ伊予ノ殿ハ
市左衛門

大酬院様伊地界
厳有院様伊代ニ本阿ハ者讃岐ノ殿ヲ
先伊代初メヲ春徳ヲ相伝綱板ノ殿ハ
相上ヲ伊知年ノ伊板天下ノ為ニ讃岐ノ殿ハ

ノ殿伊為ノ殿ノ思ヒ為ニ殿伊上云ヲ讃岐ノ物ノ出
ヲ為ヲ伊像ハ者天下伊為ヲ伊像ノ伊上ヲ讃岐
ヲ上ヲ伊前ノ上ヲ上出上ヲ上ヲ秋等幼弱ノ
一人天下ノ為大切ハ者讃岐ノ殿ヲ補佐ハ殿
ヲ上ヲ讃岐ノ為ハ感ヲ受ラレ伊知年ノ為
渡ハ者上程ハ天下ノ伊殿ハ伊ヲ用ヒサセラレハ
ヲ程ヲ為渡ノ為ハ者貞程ヲ
伊覚讃岐ノ法ヲ上ヲ伊知年ノ殿ノ
ヲ上ヲ上ヲ秋等ノ中ハ為ノ伊ヲ
ヲ碑ヲ借ハ者徳ノ為ノ殿ノ徳ノ為ノ
思ヒ程ヲ中ノ中ノ借ハ者薬何相ヲ殿ハ者曹参ヲ
為ヲ上ヲ為ヲ薬何年ヲ年ヲ挙ハ者曹参ヲ市左

○

越後高田田中昇碩ノ
所ノ移葉ヲ称ノ山ノ
片結ひ干しのあるを
ものも茶褐色表堆裏備
也

桂川曰此物朝鮮製ト義ハ先年當藩飲薬品ノ内

見ハ萩野典薬大允ハ鉄ハ丹毒ヲ
虎血勢　治脚漏　又脚中風
以一匁七日服居此茶合諸湯呑之三七日必見効
血変の時味
先年二塊ト見セ来リ虎血勢ト云薬
ヘ居所ノ老夫ハ遺忘セリ何方ヨリ来リ
○
永鎮以来出来初し事　加州甫庵曾孫小瀬復斎
遺老物語八　日下部景鮮集
伝長公所代ヲ内
一殿守の代ハ大ノ所ハ江州長浜の城
一天下ヲ治ル代ヲ天下ヲ
茶ノ所ノ初ル

一鉄炮ハ大矢ハ此れハ薩川左近将監一益ハ和ム
一丹濃流鑓師聖弥兵衛道三中御と関東ハ至て信ス
者く度の事
一七ツ道具ハ家康ハ初めこう
外様ノ者略す
秀吉公御代ノ事
一家物 此れハ秀吉公大きん左馬ハ高らかふ不自由
ようくのもの此れハ押のこ者ハ出たり
一夜箱 長ハ秀吉公ハ小姓組ハ左ハ小姓水鑓履助ハ
四ツ結ふき
一諸侯大名を一度ハあるこ回答ハ多ふ
一ものい所ハ こハ言葉使ふこ

中御様ノ御略ス